

ガンダムビルドダイ バーズー衝撃のZakuー

陰猫（改）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ザクが大好きな朝宮岩戸は初のGBNデビュウをする。

そんな彼は様々な出会いを通して、己のガンプラを極めて行く。

ザクは神にも悪魔にもなれる！

YouTubeでビルドダイバースの1話を見てたら、私も書きたくなりました。

しかし、ザクによるザクのためのザク祭り。

ガンダムも出てきますが、メインテーマはZakuなのでご容赦下さい。

だって、面白そうなんだから(；▽；)♪

因みに現在は通販でDVDを三巻まで取り寄せ中です。

また面白そうな作品に出会ってしまったぞ、ちくせう。

ハマってからやりたい事やっているの、また積み執筆してしまう（；？▽？）ゞ

これは以前、プリン製造工場さんのビルドダイバースの小説の企画に私が応募したキャラである朝宮岩戸ことティッシュのスピノフ作品になります。

・・・二次創作じゃなくて三次創作なのかも？

目次

紹介

ダイバーとガンブラ紹介 | 1

第1章【ダイバー・ティッシュ】

第1話【初GPNデビュー】 | 8

第2話【チュートリアル】 | 14

第3話【ビルドアップ】 | 18

第4話【リトライ】 | 24

第5話【初陣】 | 30

第6話【諦めぬ心】 | 35

第7話【フォースへの誘い】 | 42

第8話【進撃の覇軍】 | 46

第9話【ティッシュの意地】 | 50

第10話【愛故に愛を失ったフォース】 | 55

第11話【無理ゲーミッション】

60

第12話【チュートリアルで再訓練】

67

第13話【覇軍の過去】 | 75

第14話【マルチバトル・1】

81

第15話【マルチバトル・2】

86

第16話【マルチバトル・3】

92

第17話【マルチバトル・4】

97

第1話【結成】

140

第18話【マルチバトル・5】

第2話【再来】

145

102

第3話【大乱闘バトル】

152

第2章【空を目指して】

第1話【人探し】

107

第2話【レイドボス遭遇】

111

第2話【撤退戦・1】

114

第3話【撤退戦・2】

118

第4話【撤退戦・3】

122

第5話【運命の歯車】

128

第6話【平穩の崩壊】

134

第3章【衝撃のZaku】

紹介

ダイバーとガンブラ紹介

ダイバーネーム：ティッシュ

※GBN内のデフォルフトフェイスのジオン公国軍のパイロットスーツを着た青年。ネームのティッシュは姉のテラスとのやり取りとダイバーネームが混同した為。

リアルでは純粹にガンブラを楽しむ美大に通う20歳のデザイナーの青年。

本名は朝宮岩戸。

使用ガンブラ：ザクII+トールギス

ガンブラネーム：ドズル専用殺人機動型ザク

ベースガンブラ：ザクII

武装：

ザクマシンガン

ザクバズーカ

大型ヒートホーク

概要：デザイナーであるティッシュのこだわりの詰まった一品。

トールギスの殺人的加速のブースターをザクのスラスターの左右に2基ずつ取り付け、超絶的な加速を有するガンプラ。

ティツシュがまだ初心者と云う事もあり、未だにその操縦には安定性がない。

「ティツシュ！行きまー行くぜ！」

「あ、ヤバい・・・コントロールが・・・」

ダイバーネーム：プニプニ・ノ・ポー

※ピキリエンタポールのマスコットザクの姿をしたダイバー。

お節介焼きだが、戦闘になるとバーサーカ気質がある。

ティツシュのやり取りの後はアバターを変え、機動戦士ガンダムの08小隊に出でくるカレン・ジュシアに似たアバターに変更した。

進撃の覇軍の古参メンバーの一人。

使用ガンプラ：ザクⅢ+ガンダム試作2号

ガンプラネーム：アトミックデストロイヤー

ベースガンプラ：ザクⅢ

武装：

アトミックバズーカ+追加核弾頭×4発（初期装填分を含む計5発）

顎部ビーム砲

大型ビームサーベル

ビームマシンガン（ガーベラテトラ仕様）

メガバズーカランチャー

概要：核攻撃仕様のザクⅢ。ソロモンエクスプレスのアレンジガンブラ。

ザクⅢの高機動力とガンダム試作2号機の肩のブースターと追加バーニアでまさに大量破壊兵器と化している。

元はマスタダイバー殲滅ガンブラだが、ポールの愛機となつて未だに現役。

使用ガンブラ：ハイザック+ケンプファー

ガンブラネーム：ハイザック・バースト

ベースガンブラ：ハイザック（ティターンズカラー）

武装：

ビームサーベル×2

ツユファルム×2

V・S・B・R×2

ジャイアントバズ×2

シヨットガン

概要：ティッシュの言葉に触発されてポーが新規に制作したガンプラ。

ハイザックにケンプファーのバックパックと下半身を付けた愛を込めた機体。

バックパックのジャイアントバズとF91のV・S・B・R. になっているなど、細かなこだわりがあり、ポーの技術と相まって万能なガンプラに仕上がっている。

「私プニプニ・ノ・ポー。ポーで良いよ」

「巻き込まれたくなかったら下がりに！」

「でかい花火を上げようじゃないか！」

まあ、かなり、ヤバい花火だけどね！」

ダイバーネーム：エルピー

※エルピー・プルの衣装をした水色髪のパニーテールのアバターをしたダイバー。

非常に無口で喋る事が滅多にない。

その分、感情が表情に出やすい。

進撃の覇軍の古参メンバーの一人。

使用ガンプラ：ザクII改+ザクバーダインのリアル化

ガンプラネーム：ザクII改（ギミックパージ後はザクバーダイント2800）

ガンプラベース：ザクII改

武装：

ザクマシンガン改

ヒートホーク

概要：一見すると素人の作った素組みに近いガンブラだが、その実体はリアル化したザクバードインのアレンジガンブラである。

その強度はプニプニ・ノ・ポーのアトミックデストロイヤーのアトミックバズーカの連射を物ともせず、元ネタのターミネーターのそれに近い行動パターンをとる。

「・・・」

ダイバーネーム：皇帝

※黒い和装にクルーゼの仮面をつけた美女。

リアルは朝宮岩戸の姉である朝宮テラス。

進撃の覇軍と呼ばれるフォースのリーダーでもあるが、現在はGBNから離れている。

マスダイバーに親友だったELダイバーを殺された事で復讐する為に自身もマスダイバーとなった過去を持つが、弟のティッシュには現時点では話していない。

その実力は過去にGBDやGBNでもベスト10に入る実力の持ち主だったが、進撃

の覇軍になってからはマスタイバー狩りをする日々を送り、個人ランキングなどから姿を消している。

使用ガンブラ：魔殺駆

ガンブラネーム：覇道の皇帝

ベースガンブラ：魔殺駆（覇道武者魔殺駆）

武装：

妖刀黒刃

必殺技：

闘気斬（霸王闘気斬）

概要：

オーラ斬り。相手の装甲などを無視して放たれる必殺の一撃。

覇道武者バージョンでは怒りのオーラを解放し、周囲のものを全て薙ぎ払う。

概要：黒と金をモチーフにした魔殺駆。

マスタイバー関連に触れたり、怒りが頂点に達すると覇道武者魔殺駆の姿になると云う仕様を有する。

特に改造らしい改造はないが、暗黒の力と呼ばれるオーラを纏う事で様々な現象を起こす。

その姿や放たれるどす黒いオーラからマスダイバーと勘違いされやすいが、これは正規の設定である。

「私と遭遇した不幸を呪うが良いわ」

「マスダイバーと私を一緒にした事を後悔したまま、溺死なさい！」

「我が覇道の前に敵はなし」

第1章【ダイバー・ティツシュ】

第1話【初GPNデビュー】

朝宮岩戸はザクが大好きである。

機動戦士ガンダムシリーズで有名なやられ役であり、時には主役機以上の活躍を見せるその姿——何よりも、フォルムが好きだった。

だからこそ、不慣れながらガンプラバトル・ネクスス・オンラインなる未知の領域へと足を踏み入れる。

そして、その為に家庭用のコンシューマーの筐体とダイバーギアなるものまで用意した。

デザイナーのたまごとは言え、少しはバイトしたりなどして収入のある岩戸にはそれを買う余裕があった。

そして、彼がガンプラバトルネクススオンラインで使うガンプラは決まっている。

専用にフォルムされた神秘的な出で立ちのドズル専用ザク。

素人故に素組みで作った程度だが、HGのザクを彼なりにデザインした独自性のあるザクとなっている。

彼は早速、ガンプラバトルネットワークサオンラインことGBNにアクセスし、アバターを作るのだが、キャラ自体に特に設定やこだわりはなく、基本的なデフォルト顔でサクッとキャラを作って行く。

この時、彼は知らなかったが、仮登録ならば、ガンダムシリーズのマスコットであるハロの姿になれたのだが、本登録してしまった後には後の祭りである。

そんな事は露知らず、彼は次の問題であるダイバーネームと言う壁にぶつかる。

これも特にこだわりもないが、折角のダイバーネームなのでダサイ名前は付けたくない。

それにこのザクにふさわしいネームを入れたいと思ったので岩戸はしばし、悩む。

ーと不意にメッセージが現れ、彼はそちらを見て、げんなりする。

肝心な時にメッセージが入るとはついていないと思いつつ、彼はダイブを継続しながら接続していたスマートフォン画面のメッセージをアップする。

送り主はデザイナーとしてまだ名の売れてない彼の世話役をしている姉のテラスからであった。

「・・・えつと、なにになに？」

『夕飯の買い出しに來ているんだけど、何か買わなきゃならないのあったっけ？』かーああ。そう言えば、ティッシュがなかったな。ティッシュつと・・・』

この時、気付いてなかったが、彼はメッセージではなく、ダイバーネームにティッシュと設定してしまっていた。

こうして、朝宮岩戸ことティッシュの冒険が幕を開けるのであった。

――

――

――

ダイブして早々、彼はその行き交うアバターことダイバーの数に圧巻させられる。

「この人達、みんな、ダイバーなのか・・・」

「あら？もしかして、新人さんかしら？」

独り言で呟いたつもりだったが、どうやら、聞こえてしまっていたらしい。

ティッシュがその声に振り返ると紫色の髪をした褐色肌の男性が此方に微笑んでいた。

「デフォルト顔の新人さんなんて珍しいわね？」

私はマギー。宜しく、新人さん」

「あ、これはどうも、はじめまして、自分は――あれ？」

「ここでようやく、ティッシュこと岩戸は自分がダイバーネームなんて、いつ作っちゃったけ？と首を捻る。」

「あらあら。自分のダイバーネームを忘れちゃうなんて、うっかりさんね。そう言う時はこうやってプロフィール画面を開くのよ」

マギーと言う男性にそう言われ、彼は見よう見まねでプロフィール画面を開く。

「あ、できましたね。俺の名前はティツターって、はあっ!？」

「えっ!?!ちよっ!?!どうしたの!?!」

「・・・あ、いえ、なんでもありません。

自分はティツ・・・ティツシュです」

「あら。なによ?顔に似合わず、可愛らしい名前じゃないの?」

マギーにそう言われるが、実際のところはダイバーネームのところを姉へティツシュ・ペーパーが欲しいと送ったメッセージのやりとりとを勘違いしたなどは口が裂けても言えないティツシュであった。

「まあ、いいわ。改めて、ようこそ、ティツシュちゃん。

手始めにチュートリアルからはじめる事をお勧めするわよ」

「チュートリアル?」

「ええ。まずはカウンターに行つて来なさいな」

ティツシュはそう言われてカウンターへ向かい、チュートリアルミッションクエストを選択する。

そして、それから再び、マギーの元へと戻る。

「無事にクエストを受けれたみたいね？」

折角だし、格納庫へ行きましたでしょうか？」

「格納庫？どうやって？」

ティツシユが尋ねるとマギーは「こうするのよ」と言つてプロフィール画面を呼び出した要領で彼と共に目まぐるしく変わる背景の中を移動する。

そして、格納庫と呼ばれるエリアへまで転移し、等身大まで巨大化したティツシユのザクを見て、マギーは不自然な事に気付く。

「あらやだ。これって素組みじゃない？ーいえ、でも、このデザインのこだわり具合が半端ないわ。

素人のように見えて、ベテランのようなこだわりのある不思議な出来映えね？」

そう言うとマギーは自分のガンプラの出来とスケールのデカさに圧倒され、感動しているティツシユに告げる。

「まあ、何はともあれ、行って来なさいな」

「あ、はい！」

親切にレクチャーするマギーにティツシユは頷くと意気揚々とザクに乗り込む。

そして、そのまま、発進準備へと向かう。

「・・・凄い。本物のカタパルトみたいだ」

『発進と言ったら、あれをやるのが基本でしょう』

「あれ？ーあああ。あれですか！」

そう言われ、ティツシユはワクワクしながら発進前のアレをする。

「ドズル専用ザク！行きまああああああーす！」

ティツシユを乗せたザクはビコン！とモノアイを輝かせ、カタパルトから発進して行く。

第2話【チュートリアル】

「・・・これがGBN」

ティツシュがリアルの実感のあるVR体験に興奮していると半透明なドームに気付く。

「マギーさん。あれはなんですか?」

『あれがチュートリアルエリアよ。中に入れば、バトルがはじまるわ』

モニター越しからアドバイスするマギーの言葉にティツシュは「バトルですか?」と少し緊張する。

『そんなに緊張する事はないわよ。』

これは練習なんだし、そこまで身構える必要はないわ。

要は楽しまなくっちゃ』

「・・・そう、ですね。頑張ってみます」

ティツシュは励ますマギーに頷くとチュートリアルエリアへと侵入した。

すると、すぐにリーダーに反応が表示される。

視認出来る距離まで接近すると濃い青紫のエネミーが3機いる事をティツシュは確

認し、ザクバズーカを構えた。

「いつけええーっ!!」

ティツシユが叫びながらバズーカの砲弾を発射し、敵のエネミーに着弾する事はなかった。

「外した!?!」

『射程距離外よ!もつと引き付けて!』

エネミーの前で爆発したバズーカの砲弾に驚くティツシユにマギーが警告する。

『もう一度よ!囲まれる前に少しでも敵を減らさない!』

「は、はい!」

モニター越しのマギーに返事をするともう一度、バズーカで相手を狙う。

そして、照準が定まるとバズーカを発射した。

今度は命中し、着弾したエネミーが爆散する。

「やった!ーうわっ!?!」

エネミーを1体倒したのも束の間、ティツシユは生き残った2体のエネミーの反撃に怯む。

『落ち着いて!相手の動きを見極めるのよ!』

「そ、そんな事を言われてもー」

『あなたのガンプラには他にも武器があるでしょ。それを活かさない』

その叫びにティツシユはバズーカを捨てると腰のザクマシンガンを手にして乱射する。

ザクマシンガンは威力こそ低いが、牽制にはもってこいの武器である。

ティツシユは相手の周囲を旋回しながらマシンガンを放ち続け、なんとか、もう1体を倒す。

ティツシユはその最後の1体に照準を合わせ、再びマシンガンを乱射する。

1ーと途中で弾が出なくなってしまう。

「あ、あれ!？」

『無闇に撃ち過ぎよ！』

急いでリロードしなさい!』

「は、はい!ーうわっ!？」

ザクマシンガンの円形のマガジンをリロードしようとした瞬間、無防備なティツシユのザクにエネミーが体当たりして来る。

『リロード中も気を付けなさい!』

「す、すみません!ーあっ!マガジンが!」

転倒した事でマガジンを取り落としたティツシユのザクにエネミーがフィニツシユ

とばかりにビームサーベルを振り上げた。

「こなくそおおおーっっ！」

ティツシユは吠えるとバツク。バツクのスラスターを吹かし、木々を薙ぎ倒しながら地面を擦るようにエネミーの攻撃を回避する。

衝撃の振動を堪えながらティツシユはザクを起き上がらせるとザクの左脇に差していたヒートホークを手にする。

そのヒートホークは従来の物よりも大型化されたドズル専用の特注品である。

ティツシユのザクはそれを水平に構え、左手でヒートホークの後方を支え、右手でしっかりと掴む。

そして、スラスターを最大限まで加速させ、エネミーの機体へと突撃する。

それに対し、エネミーはビームサーベルを再び振り上げた。

ーっっっっ。

ティツシユのザクのスラスターの燃料が切れたのはまさにその瞬間である。

GBN内のガンプラが忠実にモビルスーツを再現している故にティツシユのザクはスラスターのエネルギーを使い果たして失速してしまう。

結果、頭部を破壊されながらも大型ヒートホークでエネミーの攻撃を弾き、そのまま胴体を両断すると言うギリギリの勝利をティツシユはもぎ取る事となる。

第3話【ビルドアップ】

「お疲れ様。チュートリアルはどうだったかしら？」

待っていたマギーにティツシユは後頭部を搔くと「まだまだですね」と呟く。

「チュートリアルでこれなら、これからが心配ですね。」

しばらくは慣れるまでチュートリアルで頑張ろうかと思えます」

「そう。まあ、チュートリアルは何度でも受けられるし、気を落としたり駄目よ？」

「はい。ありがとうございます」

ティツシユが頭を下げて礼を言うとマギーは「それよりも」と付け加える。

「まさか、スラスターのブースト消費の燃費があんなに悪いなんてね？」

もう少しガンプラを色々と試してみたら、どうかしら？」

「ガンプラを試すですか？」

「ええ。ガンプラは自由ですもの。」

それに素組みにも限界があるわ。

アドバイスするとしたら、ガンプラにもう少し手を加えてあげたら、今より良くなるんじゃないかしら？」

「成る程。考えてみます」

「そうしなさいな。ガンプラバトルはセンスや技術もそうだけど、最終的には愛よ」

マギーは微笑むと「頑張りなさいね、ティッシュちゃん」と最後に付け加えて去って行く。

マギーと別れたティッシュこと岩戸はオフラインモードになって現実に戻り、一息吐く。

初ダイブで少し疲れたが、チュートリアルは彼なりに白熱したバトルでかなり楽しめたーとは言え、これが対人戦のバトルなら自身の敗北は確定している。

せめて、初心者なりにガンプラを輝かせたい。

勝つ事もそうだが、もっと自分の満足のいく結果を残したいと言う欲求が出て来る。

それにマギーの言葉も彼の心に残っていた。

「ガンプラに愛を注ぐ、か・・・確かに素組みして塗装したただだし、色々やってみるかな?」

こうして、岩戸はあれこれと考える。

出来れば、素体であるドズル専用ザクはあまり、弄りたくはない。

この塗装をデカールタイプシール無しで製作するのにかなりの時間と情熱を注いだからと言うのもある。

素組み部分は見直しが必要だが、今のザク自体に大きな変更をするつもりはない。ならば、どうするか？

岩戸はあれこれ悩むが、答えが出ず、気分転換にでもとガンダムチャンネルを映像で見ると見る。

(ああ。今はガンダムWが再放送されているのか・・・って待てよ?)

ガンダムWの主人公のヒイロ・ユイが大破したウイングガンダムの代わりに搭乗するガンダムヘビーアームズとライバルのゼクス・マーキスの戦う姿を見たのをきっかけに岩戸は新しいアイデアを思い付く。

その視線の先にはトールギスの背負うブラスターを見ていた。

「これだー！」

岩戸はスマートフォンから流れる映像を見て叫ぶと翌日、美術大学の帰宅にそのガンダムを購入しにガンプラショップを訪れる。

彼が購入したのはトールギスであった。しかも二個買いである。

「あら。お兄さん、トールギスが好きなんですか?」

「ええ。でも、一番はやっぱり、ザクですね!」

そんな他愛ない会話をした後、女性店員は最後に「素敵なガンプラを作って下さいね?」と彼にウインクする。

その仕草に少しドキリとしながら岩戸は「頑張ります!」と言って自宅へと戻る。

「ただいま!」

「お帰りなさい。ご飯出来ているわよ」

「あ、ありがとう、姉さん」

帰宅した岩戸は姉のテラスに礼を言うと手短かに食事を済ませ、急いでガンプラ製作に取り組む。

そんな岩戸を見て、テラスは「あらあら」と苦笑しながら、岩戸の食べ終えた食器を片付ける。

岩戸のガンプラードブル専用ザクの問題点はスラスタールことブースターの燃費の悪さである。

これは岩戸のザク以外にも言える事であるが、初代のジムやザクはまだ世に知れ渡る以前のものなので基本設定が低い。

アニメではその理由としてジムもザクも物量戦が主体のモビルスーツである為、量産しやすく、低コストである為となっている。

故に専用機とは言え、多少カスタムしたから位では性能的な面では現在の量産型モビルスーツに遅れを取ってしまう。

だが、それはあくまでもガンダムと言うアニメの世界での話である。

ならば、もしも、ザクがそれ以上の性能を引き出せたのなら？

例えば、他作品とオマーージュした機体であれば？

その自問自答の末に彼はザクにトールギスの一对のバーニアを追加した。

これでかなりピーキーなザクとなるだろう。

しかし、それだけでは彼の目指す殺人的な加速を越えるトランザムシステムなどには及ばない。

そこで考えたのが更にトールギスのブースターを追加する事で馬力を増やそうと言う試みである。

岩戸は元からあるザクのブースターに追加されたトールギス2体分のブースターを見て、これはきつと自分には勿体無いくらいのガンプラになってくれるだろうと一人で頷く。

素組みもスマートフォンで基本的な事を学習しながら見よう見まねで加工した。

岩戸は徹夜までしてしまい、机に突っ伏して寝てしまうが、なんとか形にはなった。

そんな岩戸にそつと掛け布団を被せ、姉のテラスがそのガンプラを見て微笑む。

「楽しめたようだね、岩戸。素敵なガンプラだよ」

テラスは熟睡している岩戸に優しく囁くとそのまま、彼を起こさぬように足音を立て

ぬようにしながら、そのまま、彼の部屋から出て行く。

第4話【リトライ】

岩戸は久々にGBNにログインしてティツシュと云うダイバーになると早速、カウンターに行き、チュートリアルをリトライする。

「ティツシュ！行きま．．．あああーっ！！」

ティツシュは出撃と同時に前回とは比較的にならないGを体感し、そのスピードについて行けず、掛け声が中途半端になってしまう。

それほど、今回、心血を注いだガンプラの出来を誉めたかったが、いざ操作してみるとそこではない。

トランザム以上の速さを持つ機体速度となると操作も前回と違い、極端に難しくなる。

これでまだフルスロットルどころか通常速度なのだから、尚更、ティツシュは自分の作ったガンプラの凄さを改めて痛感する。

そして、そのピーキーさに。

「あ、やばっ．．．コントロールが．．．」

不規則な軌道を描きながらティツシュは目的地であるチュートリアルエリアへ行く

どころか、自分から地面に激突し、そのままブースターのなすがままにされて、木々を何本も吹き飛ばしながら前進して行く。

「と、止まれえええーっ!!」

そんなティツシュの願いも空しく、ティツシュはチュートリアルエリアとは別の方向にある山に頭から突っ込み、そのまま、何も出来ずにリタイアとなる。

「・・・いい、生きた心地がしない」

「おいおい、大丈夫か、坊主?」

戻って来たティツシュがぼやくとその声を拾った人物がいた。

ダイバーの人はみんな、優しいんだなと思いつつ、ティツシュは声の主に戻り返る。

その人物はどう見ても中年の男性だったが、ティツシュはこんなアバターを使う人もいるのか程度に考える。

「大丈夫・・・ではないですね」

「だろうな。少し見物させて貰ったが技術云々の問題だ。

お前さんのガンプラは初心者向けの機体じゃねえよ。

まあ、それだけ、ビルダーとして見込みがあるって事だがな」

「あの、貴方は?」

「あー。やめろやめろ。

まずはそのスタイルから改めて置け」

「ーと云うと？」

その人物は「本当に何も知らないんだな？」と洩らし、ティツシュから周囲に目を配る。

「ここにいる奴の大半はバトル目当てのダイバーだ。

そんな奴等の中には初心者からポイントを稼ごうってダイバーもいる。

そう言った奴等に目を付けられたら、坊主みたいな奴は格好の餌食だ。せめて、もつと強気でない」

「そうなんですか？」

「そこは『そうなのか？』って言うところだ。

悪目立ちせず、そこそこ強き程度なら餌になりにくいから、言葉は選んでおけ」

「成る程。わかりましーわかったぜ」

ティツシュが言葉を選びながら頷くとその男性は「その調子だ」と頷き返す。

「俺については・・・まあ、おっさんとでも呼んでくれ。

どうせ、坊主はランキングとかに興味ない口だろ？」

「え？なんで解るんでー解るんだ？」

「俺も色んな奴を見て来たからな。」

坊主のアバターを見りゃあ、情熱が違うベクトル向いているのが、一目で解るさ。

有名になろうって奴はアバターにも、こだわりを持つもんだ」

ティッシュは自称・おっさんを名乗る男性の言葉に納得すると男性は「まあ、習うより慣れだな」と呟く。

「初心者同士でバトルをしてコツを掴むってのも一つの手だ。

マギーとかにも頼んで対戦相手を探してやるから、今の内にキャラ作りでもしておけ。

「この世界じゃ、自分を偽る事も必要だからな」

「ありがとうござーありがとな、おっさん！」

「まあ、及第点だな。

精々頑張れよ、坊主」

男性はそう告げると手を振りながら去って行った。

素直なティッシュは「よし！」と独り呟くとログアウトして早速、キャラ作りを開始する。

「姉さんーあ、いや、姉ちゃん！こんな感じでどうだ！」

「粗野な感じがして岩戸を知っている私からすると新鮮よ。

ワイルド感があって良いんじゃないかしら？」

「そ、そうかな？ーじゃなくて、そうか!? そう言われると照れるぜ!!」

「ふふっ。頑張りなさいな、岩戸」

「そう言えば、姉ちゃんはまたGBNで遊ばないの?」

そう問うと今までのほほと見守っていたテラスの顔が曇る。

そして、そんな表情を見せたくないかのようにそっぽを向いてしまう。

「私はいいの。またあんな思いたくないし・・・」

姉のそんな姿を見て、岩戸は無言で俯く。

姉はかつて、マスダイバーに酷い仕打ちをされ、自身もそのマスダイバーの復讐の為に自らマスダイバーとなったと聞く。

マスダイバーが何かも知らないし、自慢の姉が復讐する目的でマスダイバーと云うものになるなど岩戸には解らない事だらけである。

それについて、姉のテラスは語ろうとしないし、目的を果たしたのか、それ以降は自身もGBNを引退していた。

そんな姉を岩戸が放って置ける事はなく、ある事を思い付く。

「姉さんーじゃなくて、姉ちゃん、今度のバトル見てくれよ!」

「え?」

「約束する! 姉ちゃんの為にも今度のバトルは良い物にするからさ!」

姉の返事を聞かず、岩戸は「それじゃあ、俺は準備があるから！」と言って自室に引きこもる。

テラスはそんな岩戸の思いと復讐の為にマスダイバーとなった自身への葛藤に悩まされる。

こんなに悩んだのは溺愛する弟がGBNをやりたいと言って来た時以来であろうか。そう思いながら、テラスは弟に答えるか、自身のケジメを守るかを悩み続け、しばらくの間、寝る事も出来なかった。

第5話【初陣】

ティツシユは後日、この間の男性ダイバーと落ち合う。

「よお、おっさん！」

「噂をすれば丁度来たな、坊主」

男性は振り返りながら、そう告げると半歩下がり、今しがた会話をしていた女性ダイバーを紹介する。

「こいつはお前の補佐係だ。」

まあ、マギーの事だから新人を連れて来るとは思うが、新人を装ったダイバーや出戻りのダイバーなんかもあるからな。

一応、注意するに越した事はねえ」

「そんな奴がいるのかよ？」

「まあ、GBNもだいたいぶ浸透したし、マスダイバーも見なくなつたからな。」

出戻りする奴もちらほらいるからよ」

その言葉にティツシユは反応すると改めて質問する。

「・・・おっさん。マスダイバーって、なんなんだ？」

「新人のお前さんが知らなくても良い事だ。

それに聞いても気持ち良いもんじゃねえ。

話すら聞きたくねえって奴もいるくらいだからな」

男性もその話をするのが嫌なのか、ティツシユの質問に答えず終いだった。

それだけ、マスダイバーと云う言葉に良い印象がないのだなとティツシユは再認識する。

「そんな事よりも、ほれ」

男性はそう言うとき軽く自分の後方を親指で差す。

その先にはマギーと二人の女性が話し込んでいた。

「マギーさん、その二人が俺達の対戦相手っすか？」

「あら。今、丁度呼ぼうと思ったのに早いわね」

マギーが此方に振り返ると女性ダイバーの二人組も此方を見る。

お互いに自己紹介をした訳だが、お嬢様口調のパトリシアと初心者だと言うゼロストロングことゼロストのインパクトにほとんど何を喋っているのか覚えていないティツシユであった。

パトリシアの「ティツシユとゼロストのタイマン勝負ですわ」の言葉に女性ダイバーが反対してコントのように転けると云った場面もあった気がするが、ティツシユはそれ

よりも素が出ないかを心配していた。

バトル前でテンパっていたのも手伝って、そのまま、ノリと勢いで喋るティツシユを案じたのか、男性がヒソヒソと耳打ちする。

「良い感じにキャラ作って来ているようだが、緊張し過ぎだ。

とりあえず、格納庫でお互いのガンプラでも見て、クールダウンしろや。

それに自分には知識を取り入れるのも勉強だぞ、坊主」

男性のアドバイスにティツシユは素直に応じると早速、パトリシア達と交渉する。

ゼロストの方はともかく、パトリシアの方は此方を警戒していたが、最終的に「まあ、構いませんわ」と応じてくれた。

格納庫エリアへと転移するとティツシユは内心で落ち着きを取り戻し、パトリシア達と男性ダイバーのそのガンプラを改めて、見せて貰う。

「おおっ！これがみんなのガンプラか！どれも個性があつてカッコエな！」

パトリシア達のガンプラもそうだが、男性達のガンプラも負けず劣らず、個性溢れる物であった。

実際、他のダイバーのガンプラを見るのは初めてだったティツシユには良い刺激となった。

（こー言うガンプラもありなのか・・・本当にみんな、凄いな。

それにパトリシアさんって人の出戻りって言うだけあって、デザイナーの俺でも解る位、ベテラン独特の風格のあるHiールガンダムだな。

きつと、この人はもつと凄いガン普拉を持ってに違いない)

惚れ惚れするフォルムとカラーリングにティツシユは心を奪われながら、そんな事を考えていると男性の咳払いに我に返り、慌てて「すまんすまん」と言つてパトリシア達に謝る。

男性のフォローもあつたが、パトリシアも純粋にガン普拉を見る事を楽しんでいてティツシユに対して、警戒を解いたのか、まんざらでもなさそうであつた。

それよりも同じ初心者ゼロストの方が気掛かりだった様子でどこか心配するような言葉を紡いでいる。

(パトリシアさんも出戻りって事は姉さんみたいに深い事情があるのかな?)

そんな事を思いながら、パトリシアとゼロストを観察していると二人の雰囲気明らかに恋人同士のそれになり、ティツシユも内心ドキドキしながら何か言おうとした男性ダイバーに「空気読めよ、おっさん」と言つて場を和ませる。

正直なところ、女性同士のイチャイチャした空気に耐えられなかつたのもあり、内心ではあの後、どうなるのかも見てみたかつたりもしていたが、ともかく、念願のバトルに意識を集中する。

その後、男性のアドバイス途中で補佐してくれる筈の女性ダイバーが先走って出撃した事もあり、ティツシユも彼女を追うように慌てて叫ぶ。

「ティツシユ！ドズル専用殺人機動型ザク！行くぜ！」

第6話【諦めぬ心】

「うわっ！ーととと・・・」

『操縦も出来ない初心者だっけ話しは本当だったのね？』

ティツシユがフラフラしながら操縦に苦戦していると女性の可変機能を捨てたような戦闘機擬きのガンプラが近付く。

『私のガンプラに掴まりなさい。』

『目的エリアまでエスコートして上げるから』

「す、すみません」

ティツシユは自分を補佐してくれる女性ダイバーの戦闘機風のガンプラに掴まるとモニター越しの彼女に申し訳なさそうにして謝る。

『ビルダーとしてガンプラの出来は褒めて上げるけれど、操縦技術はナンセンスね。』

「これが終わったら、改めてチュートリアルをやりなさい」

「はい。ありがとうございます」

『あと、素が出てるわよ？』

そう言われてティツシユは慌てて自分を演出する。

「わ、悪い悪い！」

『私は貴方に興味ないから気にしないけれど、自分で決めたロールならキチンと演じなさい』

そんなやり取りをしながら、ティツシユ達は目的のエリアへと到着する。

先に出撃したのもそうだが、男性ダイバーとパトリシアがゼロストにアドバイスと基本的な事を操作について改めてレクチャーしているらしく、少し余裕があり、ティツシユは改めて自分の武器を点検した。

「マシンガンの予備も持ったし、準備万端！」

絶対勝ってみせるぜ！」

『何言ってるの？そのガンプラで勝てる訳ないでしょ？』

張り切るティツシユに女性ダイバーはツツコミを入れると溜め息を吐く。

『貴方、ガンダムSEEDは見てないの？』

「え？あ、いや、見てたけれど・・・」

『なら、トランスフェイズ装甲についても知っているわよね？』

「あ、はい。一応は・・・」

『なら、実弾兵器が効かないトランスフェイズ装甲を持つレイダーガンダムにマシンガンやバズーカが効果あると思ってるの？』

「あつー！」

女性ダイバーにそう言われて、ティツシユは自分が最初から劣勢である事に気付かされる。

『理解したみたいね。GBNはガンプラの出来次第で原作通りの特徴を発揮出来る。』

あのレイダーガンダムは恐らく、あのパトリシアって子が手伝っているでしょうから、トランスフェイズ装甲も機能していると考えるべきだわ。

つまり、今回の勝負は最初から決着が見えているのよ』

バツサリと女性ダイバーに事実を言われてティツシユはあまりのショックに眩暈がしそうになった。

（この勝負は最初から詰んでいる？姉さんとも約束したのに？）

姉のテラスに良いバトルをしようと言った事を思い出しながら、ティツシユは俯いていた顔を上げる。

（いきなり、初戦で完敗するなどはしたくなんてない！）

これは俺だけの戦いじゃないんだ！

自分の心にそう言い聞かせるとティツシユは操縦用のスティックを握り締め直す。

「・・・俺が勝てる方法ありますか？」

『一か八か、その大型のヒートホークとブースターによる重量とスピードによる一撃必』

殺しかないんじゃない？

まあ、私だったら最初から苦渋を味わう前にバトルを降りるって手もあるわよ？』

「・・・そうですか」

ティツシユは女性ダイバーの言葉に意を決するとザクマシンガンやバズーカを捨て、大型ヒートホークを取り出す。

『僅かな可能性に希望を見出だす、か・・・嫌いじゃないわよ、そう云うの』

女性ダイバーがそう告げると同時にパトリシア達のガンプラが此方にやって来る。

「さて、と・・・ようやく、戦えるな！」

ティツシユは自分を鼓舞するように叫ぶとゼロストのレイダーガンダムを見据える。

ゼロストの黄色と黒のカラーリングのレイダーガンダムが着地するとモニターにパトリシアとゼロストの顔が映る。

ゼロストはパトリシアにアドバイスされながら「まあ・・・やってみるけど」と口にするのを見て、ティツシユはニヤリと笑みを浮かべた。

「やる気満々だな・・・して事は開始の合図とかいらねえよな！」

多少、卑怯な気もするが、ティツシユは「行くぜ！」と叫び、先手必勝を狙う。

フルスロットルでいきなり、突っ込むかに迷いが生じたのか、ゼロストの機転が良かったのかは定かではないが、ティツシユの乗るザクのヒートホークはスラスターで後

方に下がった彼女のレイダーガンダムにかわされる。

(このまま、体当たりすれば！)

そうイメージして更に前進しようとした瞬間、ティツシユのコントロールが僅かに乱れる。

未だに慣れない自身のガンプラの操作に焦りを感じながら、ティツシユはレイダーのミヨルニルと呼ばれる左腕のハンマーを喰らい、二連装52ミリ超高初速防盾砲と呼ばれるビームと実弾の雨を浴びる。

(大丈夫だ！これ位なら耐えられる！・・・そうだろ!?相棒!!)

致命的になりそうな一撃一撃を大型ヒートホークを盾にする事で耐えながら、ティツシユは自分のザクを信じるようにひたすら祈る。

ゼロストの「やった！」と油断した声が聞こえ、弾幕が晴れた時——頭部がミヨルニルで潰され、弾幕で左腕を破壊されながらも耐え続けたティツシユはその絶好の好機を見逃さなかった。

「いいや！まだだね！」

ティツシユは吼えたとこれが最後の好機だと確信し、再びブースターを起動させた。

ゼロストのレイダーガンダムがミヨルニルをワイヤーで引き戻しながら、そのまま突っ込んで来る。

再び射出するには時間がないと悟ったのか、ゼロストのレイダーガンダムがミヨルニルを左腕に装着したまま殴り掛かる。

それはコックピットを狙った一撃であり、誰が見てもゼロストの勝利は確定したも同然であった。

勝った！ーと誰かが叫んだが、ティツシユは気にしない。

「いいいいつつけえええーっつ!!」

ティツシユはコックピットを碎かれ、被弾しながらも最後まで諦めなかった。

それに応じるかのようにティツシユのザクのモノアイが光を放ち、大型ヒートホークを振り下ろす。

自ら突撃して来たレイダーガンダムとフルスロットルでブースターを起動させたティツシユのザクの相乗効果により、大型ヒートホークの一撃はトランスフェイズ装甲を持つレイダーガンダムの頭から爪先まで一直線に斬り裂くには十分な一撃を与える事が出来た。

結果的にティツシユは自分の敗北が確定する未来に一矢報い、双方引き分けまで持つて行くのであった。

「・・・やった」

最後まで諦めなかったティツシユは引き分けとは云え、敗北の未来を覆し、ポツリと

洩らすとプルプルと震えて歓喜するのであった。

ゼロストの方にも勝負に負けた悔しさはないだろうが、最初から不利なガンプラで挑んだティツシユはその倍はあるだろう喜びを感じていた。

こうして、ティツシユの初めてのガンプラバトルは幕を閉じる。

第7話【フォースへの誘い】

「本当に良いバトルだったぜ、坊主。

あの不利なバトルでよく相打ちまで持ってたもんだ」

パトリシアとゼロストと別れた後、男性ダイバーがそう言つて、ティツシユの肩を叩く。

「ありがとうございます」

操作も少しは慣れたと思います」

「それに関してはまだまだだよ。あの馬鹿みたいな速度ならヒット&ウエイも可能だった筈。

それにあの機体なら相手に手傷を負わせてから物理射撃に切り替えても十分、お釣りが来る」

相変わらず、女性ダイバーにはバツサリと切り捨てられるが、ティツシユは悪い気はしなかった。

「俺達はこちらからティメンションをやるつもりだが、坊主はどうする?」

「またチュートリアルで練習します」

早く、このガンプラに慣れないと行けませんから」

「・・・そうか。なら、ここでお前さんとは別れるようだな」

男性ダイバーは寂しそうにそう言うと「フレンド登録するか？」とティツシュを誘うが、ティツシュは「気持ちだけ受け取って置きます」と返す。

「まだ初心者とも呼べませんし、多分、足を引張つてしまおうでしょうから・・・また、お会いする時にでも、お願いします」

「そうか。そいつは残念だ」

男性ダイバーは心底残念そうにそう呟くと「じゃあな」と言つて女性ダイバーと共にティツシュと別れる。

1人になったティツシュはログアウトした。

ティツシュこと岩戸がログアウトし、自室を出ると姉のテラスがスマートフォンを見ながら泣いていた。

「ど、どうしたの、姉さん!？」

「・・・ああ。ごめんね、岩戸。」

岩戸のバトル見て、感動しちゃって」

「あのバトル見ててくれたの?」

「ええ。実弾の効かないレイダーガンダムに勇敢に立ち向かつて行った岩戸のバトルは

凄かったわよ」

姉にそう言われて岩戸はくすぐったい感覚を感じつつ、テラスに尋ねる。

「姉さんもまたやらない?」

「・・・気を利かせて貰ったのにゴメンね、岩戸。」

お姉ちゃん、まだ踏ん切りがつかなくて」

「そこは姉さんのタイミングに俺が合わせるよ」

岩戸はそう言っつて姉に自分のガンプラを見せながら笑った。

「姉さんの踏ん切りがついた時には色々教えてね。」

俺、それまで待っているからさ」

「ふふっ。ありがとうね、岩戸」

テラスは岩戸に微笑むと、ふと何かを思い出したように天井を見上げる。

「良かったら、お姉ちゃんが作ったフォースに入らない?」

「フォース?」

「平たく云えば、チームの事よ。」

まだ在籍してくれているか解らないけれど、みんな、良い人達ばかりだから、きつと岩戸の力になってくれると思うわ」

そう言うのとテラスは岩戸に一通のメールを送る。

送られたメール内容を開くと何らかのパスワードと『霸道の皇帝』と記された内容が岩戸のスマートフォンに届く。

「カウンターのフォース画面でそのパスワードを入力すれば、ロックが解除されて現存するメンバーが会いに来てくれると思うわ。」

まあ、騙されたと思って一度、会ってご覧なさい」

第8話【進撃の覇軍】

次の日、岩戸ことティツシユはテラスに教えられたパスワードをカウンターで入力し、フォース名『進撃の覇軍』なる表示を目にする。

すると、ピキリエンタポールスよろしくのマスコットのようなザクが現れ、カウンターに近付いて来る。

「あんたかい？うちのフォースの認証パスワード通ったのは？」

「あ、はい。そうですが・・・」

「私の名はプニプニ・ノ・ポー。ポーでいいよ」

「プ、プニプニ・ノ・ポー？」

「まあ、その様子だとガチ勢って訳じゃなさそうだね？」

流石にピキリエンタポールスを知らないかい？」

ゆるふわ系のザクはそう言つて笑う（？）と「それで？」と問う。

「皇帝はどこだい？来ているんだろ？」

「皇帝？もしかして、姉さんの言つてた『覇道の皇帝』ですか？」

「姉さん？ーああ、あなたは皇帝の弟さんか？ーまた、随分と手抜きのアバターだ

ね」

ポーはそうティツシュにそう返すとフレンド登録選択画面へと移行する。

「まあ、長い付き合いになるんだ、宜しくな！」

「は、はあ、宜しく願います」

ポーの言葉に困惑しながらもティツシュは頷くとポーとフレンド登録を結ぶ。

「皇帝の弟さんならキチンと世話をしないとね。」

さて、どんなガンプラか見せて貰おうか？」

ポーはそう告げると格納庫エリアへと転移し、ティツシュの作ったドズル専用殺人機動ザクを眺める。

「機動力重視のガンプラだね？」

なかなか、良いセンスだけど、それなりに腕は必要そうだけどさ？」

そんな風に笑うポーのガンプラは魔改造されたグレーと紺のツートンカラーのザクⅢであった。

改造された点としては大型化されたアトミックバズーカと追加弾倉で四発の核弾頭を背中のバックパックに装着し、ガンダム試作2号機の肩に初期ブースター以外に追加で内蔵されている。

更に百式のメガバズーカランチャーまで装備するなどの様々な趣向が施されている。

その姿はソロモンの悪夢以上の凶悪さがあつた。

まさに核弾頭のバーゲンセルである。

「私のアトミックデストロイヤーが気になるかい？」

「え？ええ。凄いガンブラですけれど、こんな使つて平気なんですか？」

「まあ、大丈夫じゃないだろうね。」

普通にこんなイカれたモビルスーツがあつたら地獄絵図は間違いないだろうさ。味方も巻き込むだろうしね。

だから、私のガンブラのあだ名は皆殺しのザクⅢなんて名前をしているんだよ」

「み、皆殺しのザクⅢ？」

「進撃の覇軍つてのは、そう云うぶつ飛んだ連中の集まりさ。」

皇帝から何も聞いてないのかい？」

ポーの言葉にティッシュは首を左右に振るとポーは「そうかい」と呟きつつ、言葉を続けた。

「まあ、入っちゃったもんは仕方がないさ。」

それよりも早速だけど、あんたと共同戦線と行こう。

安心しな。フォローはしてやるからさ」

不吉なものを感じつつ、ティッシュはポーと一緒にミッションへと出撃するのだつ

た。

第9話【ティツシユの意地】

『フォースに入るにはランクを上げる必要があるんだよ。

それまではまだ未加入状態さ』

「え？それなら俺はまだランクが低いから、まだフォースに入れないんじゃないですか？」

『まあ、そうなんだが、皇帝のお墨付きなんだから確定しているもんだろうから大丈夫な筈さ』

どうにも姉を盾にフォースに入れられそうだなと思いつつ、ティツシユはポーと共にミッションを開始した。

「ーって、これ、なんですか!？」

大量の敵に囲まれてますけど!？」

『何ってスコア上げる為の乱戦ミッションに決まっているだろ?』

「聞いてませんよ!？」

『まあ、気にするな。あんたは回避を優先してりやあ良いんだ』

そう告げるとポーのアトミックデストロイヤーはいきなり、戦線から離脱する。

「え!?! ちょっとポーさん!?!」

『ちよつと準備するから待ってな』

「ま、待って! 準備して何ですか!?!」

『安心しなよ。地上戦でアトミックバズーカは使ったりしないから』

ポーは豪快に笑いながら、そう告げるとそのまま、太陽へと向かって飛翔して行く。

そんなポーを見送った直後にバトルがスタートし、NPDのジムⅡ達がティッシュに襲い掛かって来る。

「うわあつ!?!」

ティッシュは襲い来るビームスプレーガンの嵐をなんとか掻い潜ると後方へと逃げ出す。

「無理無理無理!!」

いきなり、こんな大規模な相手に一人でどう戦えつて言うんですか!?!」

『言つたろ? あんたは回避に専念すれば良いってな?』

逃げ惑いながら叫ぶティッシュにポーはモニター越しで笑いながら遙か空から極太のビームを発射し、ティッシュのザクに迫っていたジムⅡの群れを薙ぎ払う。

『ガッツリとポイントの稼がせて貰うよ。』

私は逃げ回るあんたをこつから援護してやるから、好きにやんな。

まあ、ある程度の数を減らしやあ、あんたでも倒せるだろ?」

「簡単に言わないで下さいよ!」

俺、まだ自分のガンプラにも慣れてないのに!」

『なら、これも経験って事で♪』

そう告げるとポーのアトミックデストロイヤーはメガバズーカランチャーの次弾を発射する。

「くそっ! やってやる! やってやるぞおおおーっ!!」

自棄になったティツシユは三下のような台詞を吐きつつ、後方を振り返りながらザクマシンガンを乱射した。

撃墜までには至らなかったが、牽制するティツシユのザクを援護するようにポーのメガバズーカランチャーが火を吹く。

出鱈目の戦法ではあるが、ポーは「これはこれで連携になっているから良いか」と独り呟く。

ーとは云え、本命はティツシユのランクを上げる事なのでティツシユ自身の撃墜数も必要になる。

『粗方削ったし、今度は私が前に出るからあんたが援護しなよ、ティツシユ』

ポーはそう告げるとメガバズーカランチャーと核武装をパージして大型ビームサー

ベルを手に急降下しながらジムを一直線に両断する。

『このアトミックデストロイヤーは核やランチャー無しでも無敵だって事を教えてやるよ』

ポーはそう言うてはにわザクの姿で笑うと悪鬼羅刹の如く、ジムⅡを薙ぎ払って行く。

「・・・す、凄い」

その鬼のような戦いぶりにティッシュが呆然と見ていると両手足を切り裂かれ、動けなくなったジムⅡの頭部を掴みながらポーのアトミックデストロイヤーが此方に振り返る。

『ほれ。さっさと仕留めな』

「え？あ？」

『流石にこの状態なら外しようがないだろ？』

早いところ、楽にしてやりな』

その言葉にティッシュは迷うとザクバズーカを構え、ポーのアトミックデストロイヤーの背後から奇襲を狙うジムを撃墜する。

『なんのつもりだい？』

『的はこつちだろ？』

「俺はガンプラバトルがしたくてGBNをやっているんです！」

ポインタ稼ぎが目的じゃありません！」

『ペーパーのくせに吼えるねえ』

ポーは蔑むでもなく、軽い口調でそう呟くと頭部を掴んでいたジムIIを胴体から切り裂いて撃墜する。

『背中は預けるから、あんたなりに頑張んなよ』

「は、はい！」

『それじゃあ、ここからが本番だ。遅れるんじゃないよ、ティツシュ』

ポーのその言葉を合図にティツシュはザクを駆り、彼女のアトミックデストロイヤーに続く。

そして、ポーの助力もあつたのもあつて、ティツシュはなんとか撃墜数を5機も増やして行くのであつた。

第10話【愛故に愛を失ったフォース】

「なんのканの言いつつ、5機も撃墜するとはやるじゃないか！」

ロビーに戻るとポーはティツシユを褒めるが、ほとんどがポーのアトミックデストロイヤーのおこぼれなのでティツシユは素直に喜ぶ事が出来なかつた。

「ほとんどポーさんのお蔭ですよ。」

俺は援護射撃して、たまたま5機も撃墜出来ただけです」

「そう謙遜するなや。それでも撃墜したのはあんたなんだから」

「それでもポーさんには敵いませんよ。」

それにガンプラの完成度の違いを見せられた感じですよ。

それだけ、愛がー」

「愛なんてモノはないよ」

ティツシユの言葉を遮るようにポーがそう告げる。

はにわザクの顔の為にその表情まではティツシユには解らないが、発言には先程にはない冷たいモノがあつた。

「進撃の覇軍はそんな甘いフォースじゃないんだよ。」

皇帝は何も言わなかったんだらうけれど、私達のガン普拉に愛なんてものはないさ」
「でも、こんな思いが詰められているのに？」

「確かに籠められているだろう。憎悪に復讐とかマイナスの思いがね。」

私だつて奴等がいなければ、もつと・・・」

表情は解らないが、何かしらの負の感情をティツシユは感じ、「すみません」と謝る。

ポーはそれに対して我に返ると先程までの態度に戻る。

「まあ、気にするな。こう言う奴もいるつてだけさ。はっはっは！」

「でも、俺からも良いですか？」

「ん？なんだい？」

「確かに憎しみとかから作ったガン普拉かも知れませんが、それでもポーさんは今のガン普拉を愛しているんじゃないですか？」

でなきや、今でも使おうとなんてしませんよね？」

その言葉にポーが再び無言になるが、ティツシユはそれでも続けた。

「俺はGBNに来たばかりでまだ解りませんが、何人かのガン普拉を見せて貰いました。」

その人達のガン普拉にはそれぞれの思いが籠められていましたが、みんな、愛を感じました。

それはポーさんのガン普拉からも感じられました」

「・・・」

「だから、思うんです。はじめは違う目的かも知れませんが、ポーさんのガンプラへの愛は本物だつて」

ティツシユがそう言い終えた後、ポーはしばらく沈黙した後、ログアウトしてしまふ。

言い過ぎてしまったかどうかと思つたが、本当の事を言つたつもりなのでティツシユはログアウトしたポーを見送る事しか出来なかつた。

（・・・きつと、大丈夫だよな？）

ティツシユはそう思いつつ、自身もログアウトして一息吐く。

そして、ベッドに横になりながら、ここまでポーや姉の引きずるマスダイバーについて考える。

（奴等つて、きつとマスダイバーつて人達の事だよな？）

ポーさんも姉さんも多くは語らないけれど、それだけマスダイバーつて言うのに酷い事をされたのか・・・マスダイバーつて一体、なんなんだろう？）

ティツシユこと岩戸はベッドに仰向けになりながら、自分に何か出来ないか考えつつ、眠りに落ちる。

——

『皇帝。あんたの弟さんは優しすぎる。』

私達のフォースに入れるべき人間じゃないよ』

岩戸が寝ている間、姉のテラスにポーがスマートフォンに電話して来る。

「……そうかも知れないですね。でも、岩戸なら……弟なら何か変えてくれるかもと期待してしまうんです」

『期待って、なんだい？』

私ら、マスダイバーの被害で報復する為に作ったフォースに今更、何を期待するんだい？』

「時代は変わったんですよ、ポーさん。

マスダイバーの脅威はもう、ありません。

なら、そろそろ、その呪縛から解放されても良いんじゃないですか？」
テラスの言葉にポーはしばし、沈黙した後、どこか悲しむように呟く。

『……無理だよ。あの娘がマスダイバーに殺されて、テラスが皇帝を名乗るようになってから私達は変わったんだ。今更、戻れないよ』

最後の方はスマートフォンの方こうで泣いているのか、掠れて聞こえなかったが、テ

ラスにはその気持ちが痛い程、解っている。

そして、そんな気持ちを一番重く受け止めているのは他でもないテラス本人だと言う事も。

『・・・なんで、こんなになっちゃったんだろうね、私達は。

ただ、あの娘とガンプラで楽しんでいたかったのに・・・』

「ポー」

そんなポーにテラスは厳しい「ー」というよりも威厳に満ちた声で答える。

「皇帝として、あなたに命じます。弟を補佐しなさい」

『・・・皇帝直々の御命令とあらば』

そこで通話が切れ、テラスはGBNで撮影された一枚の写真をスマートフォン画面に写す。

「・・・貴女を失った私達はマスダイバーのいない新しい時代について行けるんでしょうか、マリア？」

第11話【無理ゲーミッション】

次の日、ティツシユがGBNにダイブするとそこにははにわザクのポーとエルピー・ブルの格好をした水色のポニーテールの少女が待っていた。

「待っていたよ、ティツシユ」

「お待たせして、すみません、ポーさん」

ティツシユはポーに頭を下げながら此方を無言で見詰めて来るポニーテールの少女を見る。

「あの、此方の方は？」

「ああ。私達の仲間さ。名前はエルピー。」

無口な奴だが、腕は確かだよ。まあ、アレを腕つぶしって言うのか解らないけれどね」

「アレ？」

「まあ、見てからのお楽しみさ。」

そんな事よりも今日は練習がてら、あんたの姉さんが作ったクリエイトミッションをやるとしよう」

「クリエイトミッション？」

ティッシュが尋ねるとポーは「そうだよ」と頷き、彼をカウンターに案内する。

そして、クリエイトミッションの一つである「新型ガンダムを破壊せよ!」と云うタイトルのミッションをティッシュに選択させる。

「本来はクリエイトミッションってのはランク限定にするのが基本なんだが、こいつはフリーランクになっている。

内容自体は至ってシンプルなんだけど、出来た奴は少ないね。

まあ、これに成功出来たら、上位ランクにも入れるーなんてジंकスもあつた位さ。未だに現役のチャンピオンもランキングTOP10に入ってるよ」

「へえ、俺にも出来ますかね?」

「それはあなたの頭次第さ。もつとも、現役のチャンピオンであるクジヨウ・キョウヤですら、トップに至らなかつた問題なんだけどね?」

ポーはそう言ってカラカラと笑うとエルピーとティッシュと共に格納庫に入る。入って、すぐにティッシュは違和感に気付いた。

そこにあるのはティッシュの制作したザクではなく、古いフォルムのザクであった。それこそ、接着剤を使う頃の旧キットクラスの物である。

「これ、ザクですよね?」

「そうだよ。旧キットのガンプラの素組みのザクさ。」

あんたにはこれに乗ってガンダムを倒して貰う」
「はあ」

あまり、ピンと来ないティツシユは取り敢えず、出撃する。
舞台はどうやら、宇宙世紀らしい。

(新型ってガンダムの事かな?ーあれ?それなら、新型ガンダムじゃなくて新型モビルスーツって書く筈じゃないか?)

首を捻りながらもコロニー内部へと入るとティツシユは周囲を観察する。

そこには初代機動戦士ガンダムの第1話のような1シーンが再現されていた。

警戒しながら前進するが何かが出てくる気配はない。

(? どう言う事だろう?)

警戒するが、一向に何かが出てくる気配のない疑問を抱き掛けた瞬間、ティツシユのザクは突如、爆発し、そのまま、ゲームオーバーになってしまう。

何が起きたのかなど解らない。

本当に一瞬の事であった。

バトルとも言えないバトルにティツシユは納得が行かず、もう一度、リトライする。

今度はレーダーやセンサーにも注意したが、気付いた頃にはミツシヨンに失敗していた。

原理も何も解らない。

間違いないく、これは頭を使う問題なのだろう。

ティツシユはもう一度、リトライし、周囲を警戒する。

『そのままじゃ、結果は同じだよ。もっと知恵を振り絞りな』

そう言われてもティツシユにはよく解らない。

気付いたら、ミッションに失敗していた。

相手がどんなモビルスーツなのかさえも解らない。

そこでティツシユは、ふと、ある事に気付く。

相手はガンダムなのは間違いないのだろう。

だが、自分はいつから、ただのガンダムだと思っていたのかと。

そもそも、新型のガンダムとあった以上、ただのガンダムではないのは間違いない。

ならば、もっと動いていなければ、やられてしまうのではないか？

そう思い、スラスターを吹かした瞬間、眼前の何かが一瞬、ブレた。

「ステルス迷彩?!」

そう叫んだ瞬間、ティツシユは何かに射撃されて再び撃墜する。

そこでしょうやく、ティツシユはこれがかなりのハードなミッションであると気付く。

――

「なんですか、このミツシオン？」

結局、攻略しきれなかったティツシユは格納庫でポーに尋ねると彼女は「そう言うミツシオンさ」とだけ返す。

「これ、本当に姉さんが考えたミツシオンなんですか？」

「そうだよ。種明かしすると旧キットクラスのザクでSEEDに出てくるブリッツガンダムを相手しろってミツシオンさ」

「それ、ほぼ無理ゲーじゃないですか？」

「だから、突破した奴らは上位ランクに入れる猛者なのさ。」

これはGPD経験者がGBNに慣れる為に行った試験ミツシオンさ。これで五感を高めるんだよ。

だから、現役のチャンピオンよりもGPD経験者の方が好成绩を残せるって訳さ。まあ、それでもトップ10入りしたクジヨウ・キヨウヤは十二分に凄いけどね」

「そんな物をいきなりやらされる身にもなって下さいよ」
「ははっ。悪い事したね」

ポーはそう言って笑うと「まあ」と言葉を付け足す。

「お蔭であんたの根性が見えたからさ」

「根性ですか？」

ティツシュが問うとポーとエルピーが同時に頷く。

「ああ。GPDだろうとGBNだろうと困難な道は何処にでもある。

それを乗り切るからこそ、ゲームつてのは面白く感じるってもんさーまあ、これは受け売りの言葉だけどね？」

ポーはそう言うのとエルピーの肩を叩く。

「それじゃあ、あとは任せたよ、エルピー」

ポーの言葉にエルピーが驚きの表情をするが、ポーがそれを気にする様子もない。

ティツシュもまだ会話すらした事のないエルピーといきなり、一緒にさせられるとあって困惑する。

「あの、ポーさん、どう言う事ですか？」

「久々に私も原点に帰りたくなってねーおっと、安心しな。皇帝の命もあるし、すぐ戻って来るから」

それだけ言うのとポーは手を振ってログアウトしてしまう。

（ポーさんって悪い人じゃないけれど、掴みどころがないなあ）

そう思いながらチラリとエルピーを見る。

無口なエルピーと一緒にされ、ティツシユはただただ困惑するしかなかった。
(本当にどうしたら良いんだらう?)

第12話【チュートリアルで再訓練】

「えつと・・・エルピーさん？」

ティツシユが恐る恐る声を掛けるとエルピーは顔だけを動かし、彼の顔を黙って見据える。

返事を期待したが、エルピーは何も言わないので会話が終わってしまふ。ある意味でポーよりもやりにくいかも知れないと思いつつ、ティツシユはポーが戻って来るまで待つ事にする。

しかし、ポーが帰って来る気配は一向にない。

「・・・ポーさん、遅いですね？」

「・・・」

「原点に帰るって言ってましたけれど、もしかしてガンプラを作っていたり？」

「・・・」

エルピーからの返事はないのでティツシユは手持ち無沙汰になり、次第に落ち着かなくなつて来る。

「・・・あの、まだ時間掛かるようでしたらチュートリアルに行っても構いませんか？・・・」

もう少しガンブラに慣れておきたいので」

そこでようやく、エルピーから反応があった。

相変わらず、返事はなかったが首を縦に振り、肯定の素振りを見せる。

その反応にホッとしつつ、ティツシユはカウンターへと向かう。

その後ろからエルピーが無言でついて来る。

「・・・あの、何か？」

立ち止まって無言でついて来るエルピーに尋ねるが相変わらず、彼女からの返事はない。

流石に焦れて来たが、ふと、ある考えが頭をよぎり、ティツシユは質問を変えてみる事してみる。

「もしかして、喋ったりするのが苦手だったりとかですか？」

その言葉にエルピーは再度頷く。それを見て、ティツシユは彼女がわざと無言で自分に返事しないのではないと理解してホッと胸を撫で下ろす。

どうやら、喋らないのは初対面だからなのもあって上手く喋らないのもあるかも知れないと自分の中で納得し、悪意がある訳ではなさそうである。

「良かったら一緒にチュートリアルに行きませんか？」

その言葉にエルピーが初めて表情を崩し、ティツシユはその笑顔を見て、ドキリとし

て自分の顔が火照るのを感じた。

エルピーの笑顔はそれだけ破壊力のあるあどけなさとか可愛さのマッチした素敵なのであった。

(・・・可愛いなあ)

ティツシユはそんな事を考えながらエルピーが喋らない事への不満が落ち着くのを感じた。

「そ、それじゃあ、よろしくお願いしますね、エルピーさん！」

ドギマギするティツシユにエルピーは頷くと二人してチュートリアルを受注し、格納庫へと移動する。

(——って、あれ?)

そんなティツシユが格納庫へと入ると自分のガンプラの隣に佇むガンプラに首を捻る。

自分の隣にあるガンプラは無改造なザクII改であった。

しかもどう見ても素組みであり、技術面で言えばティツシユより下に思えた。

「えっと、これがエルピーさんのガンプラですか？」

念の為に本人に確認するとエルピーはコクンと頷く。

「えっと、エルピーさんも出戻りか何かなんですか？」

ティッシュが再度、質問するがエルピーは首を横に振ってから初めて口を開く。

「・・・これが私のガンプラ」

「——っ!? そ、そうなんですよね!?!」

改めて、エルピーから響いた声を聞いて、ティッシュは再び顔が熱くなるのを感じた。抑揚はなかったが、エルピーの容姿を表すかのような中性的な女性の声で何処かあどけなさの残る声であったのでティッシュは彼女が喋らない理由が破壊力があり過ぎるからだと理解する。

(なるほどな。容姿だけでなく、中身も可愛いから喋らないのか・・・納得)

ティッシュは勝手に納得しっつ、エルピーと一緒に各々のガンプラに乗り込む。

(・・・あれ?)

自分のガンプラのコックピットに乗り込む際にほんの一瞬、ガンプラに乗り込むエルピーに目をやった時、ティッシュは再び頭の中にハテナが浮かび上がる。

(エルピーさんのガンプラの中を一瞬、見えたけれども随分、作り込まれていた気がするなあ。素組みな理由で内部へこだわっているからかな?)

そんな事を思いつつ、ティッシュはエルピーと一緒に出撃するのであった。

「・・・エルピー、出る」

「本当に可愛いなあ・・・おっと、ティッシュユー! ドズル専用殺人機動型ザク! 行きます!」

ティッシュはスラスタ加減を調整しつつ、なんとか無事に出撃する。

(よし。もう少しで出撃時のバーニア調節のコツは把握出来そうだな。

あとは練習あるのみって感じかな?)

そんな事を考えつつ、ティッシュはザクマシンガンを構え、チュートリアルでバトルする専用機体との交戦準備に入る。

そんなティッシュのザクの後方からエルピーのザクが追い掛ける。

エルピーのザクはバーニアを吹かすでなく、ゆっくりとした足取りで大地を踏み締め歩き、とてもティッシュの機動力には追い付きそうになかった。

「エルピーさん、エリアポイントまで歩く感じですか?」

「・・・この子、飛べないから」

「・・・えっと良かったらエリアまで運びましょうか?」

「・・・重いよ?」

「ガンプラの一体くらいなら大丈夫ですよ。多分ですけれど」

ティッシュはそう返すとエルピーのザクの手を取り、引っ張り上げようとする。

しかし――

「えっ?」

引っ張り上げようとした瞬間、機体がガクンと揺れ、ティッシュは困惑する。

エルピーの言う通り、彼女のザクはティッシュが思うよりも遥かに重かったのだ。

「——え？え？どうして？」

「・・・ギミックを詰め込み過ぎて通常のガンプラより重い、この子」

「いや、だからって、この重量はなんだかおかしくないですか？」

「なんだか鉛でも入っているような重みを感じましたよ？」

「・・・今度、教える」

ティッシュは仕方なく、エルピーの機体から手を放すと一人で先にチュートリアルポイントに入る事にする。

元々、自分の練習に彼女を誘ったのでエルピーが悪い訳ではない。

それにただの素組みにしては重量がおかしかった。

彼女の言うように何らかのギミックがされているのだろう。

そう思いながらティッシュは機動型ザクに慣れる訓練を開始するのであった。

ティッシュの操作技術は確実に少しずつ上がっていた。

しかし、戦闘技術と絡めるとやはり、まだ爪が甘かった。

射撃の回避でスラスタを使用する際に想定より踏み込み過ぎて機体が振り回されるし、その後の姿勢制御での硬直を踏まえると回避後の次の回避に手間取ると言った感じである。

（もう少し機動力を低下させるべきかな？・・・やっぱり、ピーキー過ぎてしまったかも）
そんな事を考えながらティツシユはCPU相手になんとか勝利するのであった——
とは言ってもまだまだ本当に実戦で使用するにはいまの機動力維持しつつ、ヒット&ア
ウェイをものにする。

これがティツシユの次の課題であった。

「うむむ・・・困ったぞ」

「・・・リミッターをセツトしたら？」

悩むティツシユにそう告げたのはエルピーである。彼女は続けた。

「ガンプラの出来は確かに初心者とは思えない出来だと思う。」

でも、機体のスピードに振り回されて本来のポテンシャルを発揮出来ていない。

なら、ツダとかみためにリミッターを付けるとティツシユさんも安心出来ると思う」

「・・・成る程。ずっと、このスピードに慣れる事だけを考えてましたから、リミッターを設定するのは盲点でしたね」

「少しずつ慣れて来てから、本来のスピードに慣れれば良い。そうすれば、ガンプラも答え
えてくれるから」

ティツシユはエルピーの言葉に頷くとしばし考えた後にエルピーに照れたように笑
う。

「・・・えつと、エルピーさんが色々と話してくれるようになって良かったです」
「——っ!？」

そう告げた途端、エルピーが耳まで真っ赤にして照れているのを隠すように脱兎の如く逃げ出してしまふ。

(・・・くそつ。本当に可愛いな。本当に俺よりも歳上なのか?)

そんな事を考えながらティツシユはメッセージを開く。

相手は自分の姉であるテラスからであった。

「姉さんからですな。ご飯の準備が整ったから早く戻って・・・って、もうそんなに経っていたのか」

ティツシユはウインドウメッセージを閉じ、恥ずかしがるエルピーに軽く手を振る。

「エルピーさん、また今度」

「・・・うん。またね?」

こうして、有意義な時間を過ごし、ティツシユはGBNからログアウトするのであった。

第13話【覇軍の過去】

——それから数日間、ティツシユはチュートリアルで納得のゆくまで訓練を続けた。

（リミッターを設けるだけで、こんなには違うものなのか・・・これなら俺でも上手く扱える筈）

ティツシユの安定し始めた操作に機動型ザクが呼応するように正確にエネミーを撃破する。

あれだけ操作などで苦戦していたのが嘘だったかのようにティツシユの技量は上がっていた。

（よし。これなら足を引つ張ったりしないで済むだろう。）

そろそろ、フォースに入る為にポイントとか貯めたいところだなあ）

「お〜い、坊主」

次のステップを悩んでいると以前、彼を誘ってくれたジオンのスーツを身にまとった男性に会う。

「あ、あの時のおじ——おっさん！」

「相変わらず、チュートリアルで訓練しているのか？」

「だいが、動きが洗練されて来たじゃねえか？」

「まだまだですよ——じゃなかった。まだまだ、こんなもんじゃねえぜ！」

「ロールについてはまあ、及第点だな。まあ、坊主は根っからの真面目タイプみたいだし、ロールつてのが、なかなか難しいのかも知れんがな」

「ティツシユが困ったように頭を掻いて笑うと彼にロールを教えてくれた年輩のジオンスーツの男性が改めて自己紹介をしてくれる。

「覚えているかは解らんが、俺の名はアタリメつて言うんだ。

まあ、周りの連中からはおっさんつて呼ばれているがな」

「ティツシユです。改めて、宜しくお願ひします、アタリメさん」

「そんな改まつて呼ぶのはやめてくれ。こそばゆくなつちまう。

前のロールみたく、おっさんで構わんさ」

「わかりました。アタリメのおじ——おっさん」

アタリメと名乗る男性アバターは「本当に真面目な奴だな」と眩くとティツシユをバトルに誘う。

「そろそろ、チュートリアルで訓練するのも慣れた頃だろう？」

今回はあの時、組んでいた嬢ちゃんはいないが、また別の奴を誘つてある。チームバトルつてのも初めてだろうたからな。

まあ、何事も経験つてもんだ」

アタリメはそう言うつて豪快に笑うとティツシユに改めてフレンド登録を申請する。ティツシユも笑つて頷くと改めて、アタリメとフレンド登録をするのであった。

「よし、これでまた一緒に組もうじゃねえか。」

坊主の腕もだいぶ上がつて来たようだし、これから面白くなるぜ。

そう言えば、坊主はもうフォースは決まっているのか？」

「え？ええ。知り合いの紹介で良ければって事で」

「ふむ。そうなのか。まあ、無理にフォースに誘うのも気が進まんしな。」

「因みになんてフォース名だ？」

「確か・・・進撃の覇軍でしたか」

「フォース名を口にした途端、アタリメの笑みが凍りつく。」

「・・・坊主。悪い事は言わん。考え直せ」

「え？」

「進撃の覇軍つてのはブレイクデカールを違法と知っていないながら使っていたフォースの一つなんだ。」

「坊主みたいに楽しくガンプラバトルを楽しんでやっている奴が入る場所じゃねえ」

「・・・アタリメさん。以前にお会いした時にブレイクデカールの件を洩つてましたよね

?

改めて、教えてくれませんか？……ここだけの話ですが、身内に関係のある話ですの？」

アタリメはティッシュの真剣な眼差しにしばし考え込むと解ったと頷く。

「原理については俺も詳しい訳じゃねえ。」

だが、GBNのデータ干渉に深刻なバグを植え付けて飛躍的に能力を上げる——所謂、チートの種類だ」

「……」

「しかもこのデカールは使用しても違法した痕跡をGBNのデータに残さねえ——となりやあ、バトルで負け続きの奴や勝ち負けに拘る奴なんかが必然的に欲しがっちゃう。」

それによってGBNはバグが大量発生してシステムが崩壊寸前にまでなっちゃった。

ビルドダイバーズの加入した有志連合が結束されるまではな。

こいつもどういう原理かまでは詳しい事は知らねえが、ビルドダイバーズのリクつて奴の活躍でシステムは何故か回復した。

いま思えば、あれがELダイバーの影響だったのかもな」

「エルダイバー？」

「GBN内の思いの塊みたいなもんだ。当初はGBN内に生息するバグの類いとして公

にされた。

その時に有志連合をまとめていたチーム・アヴァロンとビルドダイバーズが決別してな。

結果は有志連合の勝利になる筈だった——が、今回はビルドダイバーズの思いが勝った。

それでもって、それから数年して、また色々とおつてな。

いまのGBNってのはそのELダイバーと言う電子生命体とGBNアバターの溜まり場になった訳だ。

まあ、この辺りは坊主に関係あるか解らんが、進撃の覇軍ってのは、そのブレイクデカール絡みでひと悶着あったフォースの一つって訳だ。

毒を以て、毒を制すなんて、ことわざがあつたが、それをしちまつた事で姿を消したのが、進撃の覇軍ってフォースさ。

ブレイクデカールを潰す為に自分らもマスダイバーになってブレイクデカールで報復する負の連鎖に囚われた悲しい業を背負った連中さ」

「・・・それが、覇軍・・・姉さん達はそんなフォースを立ち上げていたのか」

「信じられんのも解る。だが、こいつはニューースでも話題にもなつたくらいだ。」

過去のニューースを遡れば、その時の事がいまでも閲覧出来るだろう」

浮かない顔をするティツシュにアタリメは「話はおしまいだ」と告げる。

「まあ、どうするかは坊主次第だ。流石の俺にも坊主に正しい道つてのを示してはやれそうもねえからな。こいつについては一人でじっくり悩む事だ」

「はい。教えて頂いて、ありがとうございます。」

確かに身内が——あんなに優しい姉さんやポーさん達がそんな事をしていたなんて言われて、未だに信じられません。でも、だからこそ、きつと何か理由があると思うんです」

「…そうか。まあ、坊主にも何か理由があるみたいからな。それなら尚更、なんかあった時の為にバトルの経験は必要だろう？…話が逸れちゃったが、今回はバトルに誘うのが目的だからな」

そう言ってアタリメはティツシュをバトルに誘うのであった。

第14話【マルチバトル・1】

「改めて、紹介する。こいつがチュートリアルで訓練ばかりしていたティツシュって坊主だ」

「ティツシュです。宜しくお願いします」

「おい、坊主！ロールロール！」

「あ、すいませ——げふんげふん！」

「よう！俺がティツシュだ！宜しくな！」

アタリメさんに指摘されないとついつい、ロールを忘れてしまう。アタリメさんも俺を思つてロールするように注意してくれているのであんまり、素を出すのはいけないな。

「まあまあ、アタリメさん。ティツシュって子もまだまだ初心者みたいだし、ロールについては慣れてからでも良いんじゃないかしら？」

「そうもいかなだろ、サクラの嬢ちゃん。」

「こういう素が真面目な奴ほど騙されやすいのがGBNみたいなもんだしよ。」

「何よりティツシュの坊主はどうみても初心者狩りの格好の的だろ？」

アタリメの言葉にサクラと呼ばれた女性アバターも「確かにそうね」と肯定する。

「はじめまして、ティツシユさん。私はサクラ。宜しくね?」

「はい。宜しく願います」

「ふふつ。アタリメさんの心配するようにティツシユさんは真面目そうだし、騙されやすそうな気がするわね?」

微笑むサクラに対し、ティツシユは「そうですね?」と照れたように笑う。

そんなティツシユにアタリメがこつそりと囁く。

「あんまり、気を許すなよ、坊主。こいつ、ネカマだからよ」

「?。ネカマ?」

「あら、アタリメさん? ティツシユさんに何かおつしやいましたか?」

「・・・いや、なんでもねえ。思っていたよりも坊主が何も知らなすぎて困っちゃったくらいだよ」

「?」

アタリメは「今度、キッチンと説明してやつからよ」とだけ言つて他のメンバーを紹介する。

「んで、サクラの隣から順にナーナとスパードだ。

こいつらもベテランだから色々と参考になるだろうよ」

「ナーナ・C・エイスだ」

「スパードだ。宜しく頼む」

サクラとは違い、口数少なく、フルフェイスマスクの連邦兵士であるナーナとオーブのデフォルトフェイスのスパードが答える。

「あの、ティツシュです。まだまだ初心者ですが宜しくお願ひします」

「・・・本当に初心者なのか？ 出戻りとかではなく？」

「スパードが疑うのも解るが、まあ、その辺りは俺が保証する。実際、ネカマって単語すら解ってなかったら、こいつ？」

その言葉にナーナとスパードは顔を見合せ、お互いに頷く。

「まあ、おっさんがそこまで言うのなら信じるよ。」

改めて、宜しくな、ティツシュ」

そう言うときスパードが代表で手を差し出し、ティツシュと握手を交わす。

「さて、そうと決まれば、バトルしようか・・・数的にやあ、もう一人は欲しいが、まあ、ティツシュの坊主が初心者なのを考えりやあ、これ位のハンデが——」

「なにやら、楽しそうな事をしているじゃないか、アタリメのおっさん」

そう言うて現れたのはトテトと二足歩行で歩いて来る猫であった。

その猫の姿にはインターネットに少なからず疎いティツシュでも知っている程の有

名な物であった。

（あれって現場ネコって言うんじゃないやなかつたっけ？

こんなアバターを使う人もいるのか？）

ティツシユがそんな事を考えているとアタリメが溜め息を吐きながら質問する。

「何か用か、ムメイ？」

「連れない事を言うじゃないか、アタリメのおっさん。

聞こえていたよ、一人足りないよね。

なんなら、加わっても良いんだよ？」

「悪いが、『厄災の獣』なんて、お呼びじゃねえんだよ」

「本当にそうかな？ そのティツシユって彼は覇軍ってフォースに入りたいって聞いて

いるけれど」

「・・・お前、立ち聞きしてやがったのか？」

「傭兵にとつて情報は貴重な収入源だからねえ。

彼が本当に進撃の覇軍に加わるのなら、此方もある程度のデータは欲しい訳さ」

なにやら、不穏な空気が漂う中、ムメイと呼ばれた現場ネコがティツシユを見据える。

「決まるのは君だよ、ティツシユくんとやら」

「えっと、よく解りませんが、一緒にバトルしたいのなら構いませんよ」

「おい、坊主!？」

その言葉にアタリメが制そうとし、ムメイが思わず、笑ってしまふ。

「ふふつ。よく解らない、か・・・考えてないだけなのか、それとも・・・まあ、良い。

君に敬意を評して最高の戦いをしよう」

「・・・つたく、少しは考えろ、坊主。相手は傭兵なんだぞ?——つて、まさか、傭兵が

なんなのか解らないなんて言わないよな?」

アタリメの言葉にティッシュは素直に頷いて答える。

「傭兵つて単語くらいは聞いた事がありますが、GBN内で傭兵のロールしているつて
だけですよね?」

「まあ、間違っちゃいないが、その考えだと後が怖いぞ?」

「それつて、どう言う——」

「GBNの傭兵つてのは確かにロールだ。だが、実際に金を貰つて何でもするつても
ねえ奴つてのものいる。

ムメイはそのとんでもねえ奴の方なんだよ」

「バトル中には気を付けろよ?」とアタリメはティッシュにアドバイスすると改めて、格
納庫に全員で転移する。

第15話【マルチバトル・2】

「これがみんなのガンプラか・・・凄いなあ」

「おっさん。ティツシユがまた・・・」

「それだけ、ガンプラが好きなんだ。」

「いまはそつとしておいてやれ」

アタリメはそう言うのとサクラ達に顔を向ける。

だが、その顔は今一つ浮かない。

「本当にティツシユさんはマスダイバーのいたフォースに入ろうとしているの？・・・全然、違法デカール使う人には見えないけれど」

「そうだな、サクラ。俺もこの道は長い方だが、坊主みたいな奴は本当にガンプラを愛している奴だ。これは間違っちゃいねえだろう」

「だが、ブレイクデカール使っていたマスダイバーのいたフォースに入ろうとしているんだろ？・・・本当に信じて良いのか？」

アタリメとサクラの会話にスパードが割って入ると険しい顔でティツシユの後ろ姿を観察する。

「悪いけれど、さっきの話が本当にそうならバトルを辞退させて貰いたいんだが」

「・・・スパード」

「バグがどれだけ深刻だったかはおっさん達だつて知っているだろう?・・・そんな事をして来た奴に背中なんて任せられない」

「スパードくん。ティツシユくんがマスダイバーつて訳じゃないんだよ」

「でも、今更、違法したフォースに加わる気にいるんだろ?」

「また何か企んでいるんじゃないのか?」

「ちよつとスパードくん、言い過ぎだよ」

「みんなが危惧している事を言っているだけだよ。」

「それに俺はティツシユつて奴の事は解らないけれど、マスダイバーだった奴の事は何人も見てきたからな」

「・・・そう、だったな。お前は有志連合でマスダイバーと戦った事のあるダイバーだったものな」

「アタリメは思い出したように眩くとしばし、考え込んでから頷く。」

「お前の気持ちはわかった」

「ちよつ——アタリメさん!?!」

「だからよ。本当にこいつがどんな奴が実際にバトつてみるよ」

その言葉にスパードはしばし考え込む。

「成る程。語るのなら拳で語れって事か・・・悪くないな」

「まあ、そう言う事だ。ナーナもそれで良いだろう?」

「勿論」

スパードに共感されたのか、ナーナも頷くとサクラは疲れたように肩を落とし、「男つて本当にバカなんだから」と呟いてアタリメを見据える。

「わかったわよ。けれども、私はティツシユさんを信じるからね」

「随分と肩を持つじやねえか、サクラ?」

「まあ、真つ直ぐ過ぎて、ほっとけないからね。」

昔の自分を思い出しちゃうわよ」

「・・・坊主もいつか、ネカマになるのか。想像したくもねえな」

「もう!私はいくらでも真剣なのよ!」

——周りの会話や笑い声を聞きながら、ティツシユはアタリメ達が作ったガンプラを真剣に見詰めた。

(本当にみんな、凄い技術だな。アタリメさんのZプラスの改造とか改めて見るとただ凄いだけじゃなくてロマンも感じる。

サクラさんのザクキャノンは——見た事ないキットだな。

多分、かなり昔の模型キットを使っているんだろうな。

こんな昔のキットを使う辺り、サクラさんもなかなかのベテランなんだろうな、きつと・・・これがどんな動きするのか、早く見てみたいな。

スパイダさんのソードストライクの改造とかも凄いい完成度を感じる。

多分、見た感じ、近接特化なんだろうな。これの間合いに入ったらと思うとゾツとする。

ナーナさんのガンプラも凄い。

追加装甲が多すぎて原型をほとんど留めてないけれど、なんだろう？・・・凄い気になるな。

凄いやいと言え、ムメイさんのガンプラもよく解らないけれど、多分、サザビーを使っているのかな？

あとのベースはなんだろう？・・・気になる)

「そんなに見詰められると照れるね」

そう言つてティッシュに話し掛けたのは現場ネコのムメイであった。

「皆さん、時間と手間暇掛けているのが解ります。ガンプラの愛がここまで伝わる位です」

「ガンプラへの愛か・・・そう言われると悪い気はしないな」

現場ネコのムメイはそう言うと言顔を上げ、ティッシュのガンプラを眺める。
「ティッシュくんのガンプラも愛を感じるよ。」

初めて作ったガンプラを動かしたい。戦ってみたい。

勝ち負けを経験して、もっと成長したい——そんな気持ちが籠められているのだろう？」

ムメイはそう言うと言と被っていたヘルメットを目深く被る。

「だからこそ、知りたいんだ。ティッシュくんがどんな気持ちで覇軍に入るのか……我々の脅威をまた持ち出すサイドの人間なのかを……」

「ムメイさん？」

「……すまない。忘れてくれ」

「……いきなり心理戦とはやる事がえげつないな、ムメイよ？」

二人の会話に割って入ったのはアタリメであった。

アタリメは続ける。

「坊主の弱みに漬け込んで躊躇わせるのが目的か？」

既にバトルは始まっているってか？」

「おっと、厄介な相手が来てしまった。では、また会おう、ティッシュくん」

アタリメの登場でムメイが退散するとアタリメはティッシュを見据える。

「次の対戦だが、坊主と俺、サクラがチームだ。宜しくな」

「はい。こちらこそ」

「こいつが終わったら、またゆっくり話そうじゃねえか・・・今度はそうだな。また、最初にあつた頃の組み合わせで楽しむのもありかもな。」

まあ、あの時の嬢ちゃんはあるから色々飛び回っているみたいで音信不通だから何時になるかわからないけれどよ」

「・・・アタリメさん」

「おっさんで良いつつたろう？——まあ、いまは楽しめや、坊主！」

「はい！」

アタリメの激励にティツシユは頷くと楽しむ事だけを考え、出撃準備を開始するのであつた。

第16話【マルチバトル・3】

「ティツシユ！ドズル専用殺人機動型ザク！出ます！」

「アタリメ。Zプラス・ハードライダー・・・出る！」

「スペリオルザクキャノン！出ます！」

ティツシユ、アタリメ、サクラの三人はまとまって出撃すると周囲を警戒する。

「アタリメさん、そんなガンプラでいけそうですか？」

その、土星エンジンをつつもつけて分解とかしませんよね？」

「解ってねえなあ。それがロマンってモンよ、サクラの嬢ちゃん」

そんな会話をしている最中、接近警報が表示される。

「アタリメさん！」

「解っている！各自、散開しろ！」

まとまっていたら、やられるかも知れん！

特にムメイのガンプラには気を付ける！

何を使って来るか予想せにやならんからな！」

そんな事をアタリメが叫んだ瞬間、黒い何かが通過する。

「うわっ!」

「坊主!」

「アタリメさん、ダメ!」

スレスレで避けたティツシユのザクにアタリメが叫んで近付こうとしたが、何かに気付いたサクラがアタリメのZプラスを掴んで引き寄せ、そのまま地面に落下して突然の爆発を回避する。

幸い、ティツシユのガンプラは表面が焦げる程度の損傷で済んだが、それを見計らったかのように爆発の煙に紛れてアンカーがティツシユのザクに巻き付く。

アンカーに引き寄せられた先にはスパードのガンダムSDSが存在し、エクスカリバーレーザー対艦刀を構えたまま、待ち構えていた。

「坊主!」

アタリメが叫んだ瞬間、スパードのガンプラがティツシユのザクを一閃する——かに思えたが、ティツシユはアンカーの巻き付いた右脚部をヒートホークで自ら切断する事で直撃を辛うじて回避する。

しかし、空振りしたスパードのガンダムSDSは止まらない。

半回転した体制がてらエクスカリバーを捨て、ビームブーメランを投げつけて来る。ティツシユは上昇する事で直撃を避けるが、戦い方に迷ってしまう。

(また実弾の効かない相手か・・・どうする?)

今回は近接戦特化のスパイダさんのガンプラだ。同じ戦法が通用するとは思えないけれど、試すか?)

お互いに対峙して動かない状態が続く中、周囲は周囲で変化があった。

「サクラ・・・さっきの爆発はなんだったと思う?」

「おそらく、なんらかのオプションパーツですね。」

多分、スパイダくんのガンプラとは別の機体が存在するかと」

「——だな。一瞬の出来事だったからあくまでも推測だが、ありやあ、ナーナのスターブ・ジエガンだったと思うぜ」

「なら、ティッシュくんは二体同時に相手しているって事ですか?」

「いや、あいつらはベテランだ。初心者狩りをする奴らとはまた違う。」

二人して積極的に初心者を狙うなんて野暮な事をしないだろう」

「——と言う事は」

「ああ。狙いは俺達だ」

そう告げた瞬間、射撃攻撃がされる。

「・・・狙いが単調だ。自走砲の類いか?」

「アタリメさん、来ます!」

サクラがそう叫んだ途端、ナーナ・C・エイスのスターブ・ジエガンが突撃して来る。「あれって機動戦艦ナデシコのブラック・サレナみたいですね——となるとやはり、あれが来るんでしょうか？」

「そう言ったコンセプトを意識して作られているのなら再現して来る奴だって、いるだろうな」

アタリメは警戒するサクラにそう告げるとデュアルビームライフルを構え、射撃で牽制する。

「やつこさんの相手は任せろ。サクラの嬢ちゃんは一——」

「ムメイさんに警戒しつつ、ティツシユさんの援護ですね？」

「そういう事だ。すまねえが、宜しく頼む」

サクラが飛び去るとアタリメはデュアルビームライフルを捨て、土星エンジンの2基を点火させ、ティツシユの機動力をも上回るスピードでナーナのガンプラに肉薄する。

「ふむ。アタリメのおっさんが動いたか．．．まあ、概ね想定通りと言ったところか」

前線から離れたところでムメイは観察しつつ、手頃な武器が落ちてないかを探す

このような乱戦時、不要な武器が捨てられるのを計算し、それを有効活用するのも一つの手段である。

傭兵として武器には選り好みする事はせず、極力現地で調達するのが、傭兵稼業を続ける秘訣である。最低限の情報漏洩はしない。

「もうそろそろ、現地調達と行きますかね」

ムメイはそう言うモノアイを輝かせ、自分のガンブラを起動させる。

第17話【マルチバトル・4】

（・・・成る程・・・確かにコイツは）

ティツシユの切断したザクの脚部が絡まったアンカーをパージしながらスパードはザクマシンガン回避しつつ、頭部のイーゲルシユティンを放ちながら彼を観察する。

（装甲の相性的にも戦い方的にも劣勢・・・普通の奴ならこれで挫折する。それなのに諦めずに模索する）

「認めるよ。間違いなく、あんたはガンプラと真剣に向き合っている奴だ」

スパードはそう呟くとロケットアンカーを射出する。

だが、狙いはティツシユのザクではない。

「アンカーにはこういう使い方もあるんだよ！」

そう言つてスパードはティツシユのザクに向かって回転し、アンカーが絡まった対艦刀を振るう。

予想していなかった使い方にティツシユは一瞬、迷った。

それが彼の運命を決める。

「うわっ！」

突然の予想外の中距離攻撃に左腕と2基のブースターを持って行かれながらスパードのガンダムSDSがティツシユの予測落下地点を目指し、突撃する。

その目と鼻の先でスパードのガンダムSDSは動きを止める。

「・・・俺も焼きが回ったか。少々、ティツシユさん——あんたに固執し過ぎてしまったようだ。

お蔭であんたがどんな奴でどんな気持ちでガンプラバトルやっているか知れたと思う。

今度は私怨抜きであんたと一緒にチームを組んでみたいな」

スパードはそう告げると後方のモニターに映ったスペリオルザクキャノンに視線を見据えた。

「実弾兵装のザクキャノンがビーム兵器を使う、か・・・旧キットだからって少し舐めていたな。ビームキャノンによる遠距離射撃・・・それも確にコックピットを狙った一撃とは」

スパードはひとり呟くと最後にこう言った。

「あんな兵装・・・俺もやってみたいけれど、今月足りるかな？」

それを最後にガンダムSDSは沈黙する。

「ティツシユさん、だいじよ——」

そこまで言いかけて、サクラは此方に迫って来る敵に振り返る。

次の瞬間、衝撃が走った。

「奥の手は最後まで取っておくのは戦術の基本だ」

そう言ってムメイのガンプラー——ソロモンガンダムはガンダムSDSが残した対艦刀を手にする。

「まあ、この程度なら此方の手をさらけ出す必要はなさそうか・・・」

「くっ！このっ！」

「確かに旧キットのザクキャノンが一撃でスパードくんのガンダムSDSを仕留めるとは思わなかったが、逆に言えば、サクラさんはそれだけの実力があるダイバーって事——

——能ある鷹は爪を隠すとはよく言ったものだ」

スペリオルザクキャノンは撃破は無理と判断するや否や一斉砲撃を試みる。

そんなビームの嵐をソロモンガンダムは容易く回避し、旧キット特有の固定されて動かせない胴体を対艦刀で貫く。

そんなソロモンガンダムに対し、サクラはスモークデイスチャージャーを散布する。

「・・・今更、スモークを散布した？」

「奥の手は最後まで取っておくって言ってたわよね？・・・それは此方も同じよ」

「ちいっ！」

次の瞬間、巨大なビームによる砲撃がスペリオルザクキャノンとソロモンガンダムを襲う。

砲撃したのは半壊したサクラが用意したビッグガンであった。

そして、それを乗るのは半壊したティツシユのザクであった。

「初めて、ビッグガンによる狙撃をしたにしては悪くなかったよ。

ただ、今回は相手が悪かった、か・・・」

そう呟いてサクラのスペリオルザクキャノンは撃破される。

そんなソロモンガンダムはと言うと多少の損害はあったもののほとんど無傷であった。

しかし、ただ無傷と言う訳ではない。

「・・・危なかった。ホロスコープシステムでユニットを盾にしていなかったら、流石に俺のソロモンガンダムでも致命傷になっていたかも知れなかった。

急増コンビビとは思えない連携だった——いや、サクラさんのそう言ったエスコートの仕方が上手かった」

そう告げるとソロモンガンダムはユニットに手を伸ばし、ロングライフルを手にする。

「故にこれはティツシユくん達の連携に対する最大限の敬意であり、手向けだ。

また手合わせを願う時、更に強くなっている事を願うよ」

それが最後の言葉となり、ティツシユのザクを乗せたビッグガンをムメイのソロモンガンダムがロングライフルで貫くのであった。

第18話【マルチバトル・5】

「すみません、アタリメさん。負けちゃいました」

「気にするな、坊主。相手が悪かっただけだ」

「確かに相手に負けて悔しいです。でも、まだ終わりじゃないですよね？」

「ああ。坊主の言う通りだ・・・そうだよ。まだ終わりじゃねえ」

「アタリメさん、俺達の思いを託させて下さい」

それを最後にティッシュとの通信が途切れる。

「勝負はついたも同然、俺を倒してもムメイさんが残っている。ここまで不利なら降参するのを勧めますけれど？」

「・・・俺もそうするつもりだったんだが、気が変わったよ」

アタリメは静かに眩くとコントローラーを強く握った。

「今まで色んな奴から俺のガンブラはやれ欠陥機だの、まともに戦えないだの言われ続けて来た。けれどな、そんな事を言われても男つてのは夢を見ちまうもんだ」

「・・・」

「そんな俺によお。あの坊主は託してくれたんだぜ？・・・欠陥機だとか、そんな事を言

うでもなく、俺がバトルで勝つ事を託して来やがった」

その言葉に応じるようにアタリメのZプラスの顔がナーナのスターブ・ジエガンを見据える。

「降参なんて出来るかよ。最後まで足掻いて戦った坊主やサクラの嬢ちゃんが俺の勝ちを信じているのによ。」

「いや、サクラの嬢ちゃんとは分からねえ。だが、こんな俺に坊主は託してくれたんだぜ？」

そう告げるとZプラスの2基の土屋エンジンが火を吹く。

「結果が問題じゃねえ。普段なら呆れられる俺のガンプラに託してくれる奴がいる。」

「そんな奴がいるのに不利だからって降参する奴がいるかよ」

「・・・やっぱり、アタリメのおっさんも漢だな」

そう言つてアタリメとナーナは高速機動でのバトルを繰り広げるのであった。

（やっぱり、アタリメさんは凄いな・・・必ず勝つて下さいよ。信じてます）

「嘘・・・アタリメさんのガンプラがまともに戦っている？」

信じて待つティッシュとは違い、普段のアタリメのガンプラ戦を知る者はそのガンプラバトルに驚き、魅了された。

まともに戦えないと笑う者もいた。欠陥機だと言う者もいた。

そんなアタリメのガンプラがたった一人の初心者に思いを託され、いま羽ばたいていく。

ある意味、それは奇跡のような光景であった。

そんなアタリメのZプラス・ハードライダーに対し、ナーナも底力を見せる。

備えていたアーマーオプシオンをパージし、アーマーオプシオンを機雷代わりに爆発させるが、アタリメのZプラス・ハードライダーはそれが爆発するよりも早く通過する。

その他、用いれるオプシオンパーツを使い、迫り来るZプラスから距離を取ろうとするが、差は寧ろ、縮まる一方であった。

そんなハイスピードバトルも終わりを迎えようとしていた。

追加オプシオンパーツをパージした事でナーナのスターブ・ジエガンは明らかに減速していた。

そんなナーナのジエガンにアタリメのZプラスのビームライフルが照準を合わせる。

(勝った！)

ティッシュはアタリメの勝利を確信し、ソロモンガンダムを忘れてそう叫びそう

になった。

次の瞬間、土星エンジンが分解し、アタリメのZプラスは火の玉となって墜落して爆散する。

「battle end」

そんな電子表示が無情にも表示され、ティッシュはショックを受ける。

だが、それも一瞬の事で自分達が敗北した事よりも予想外のアクシデントでアタリメがショックを受けていないかの方が気掛かりになり、アタリメに会いに向かう。

「・・・アタリメさん」

「わりいな、坊主。折角、託してくれたのにこんな終わり方になっちゃってよお」

アタリメは後ろを向いたまま天を仰ぎ、そんなアタリメに対し、ティッシュは告げた。

「アタリメさん。ありがとうございます。」

マギーさんの次に声を掛けてくれたのが貴方で良かったです」

「まあ、出来れば、坊主の為に勝ち星上げてやりたがったがな」

アタリメは「ガハハハ」と笑うとティッシュに「すまねえ」と謝る。

「ちよつとガンプラで次のアイディア浮かびそうなんだわ。」

少し独りにしてくれねえか？」

その言葉にティッシュは何か言葉を返そうとしたが、結局は何も言えずにその場を後

にするのであった。

そんなアタリメは泣いていた。

年甲斐もなく、負けた事が心底悔しかった。

そして、最後まで自分の勝利を信じてくれたティツシユの気持ちが嬉しかった。ティツシユの為に勝ち星を上げたかった。

それと同時に自分の気持ちに答えてくれたガンプラと心が通ったような気がして嬉しかった。

そして、あのような結末で終わった事が悔しかった。

アタリメはそんなぐしゃぐしゃになった感情を胸に独り、男泣きした。

——こうして、ティツシユの初めてのチームバトルは幕を閉じたのであった。

第2章【空を目指して】

第1話【人探し】

「今回は色んな体験が出来ました。誘って頂き、ありがとうございます、アタリメさん」
「なに、良いって事よ」

チームバトル戦後、ティッシュは改めてアタリメに礼を言う。

皆、それぞれ、自分のガンプラに閃きが浮かんだと言う事で先の一戦でお開きと言う形となったのだ。

「アタリメさんのガンプラ凄かったです。結果的に今回は負けちゃいましたが、次は勝てますよね？」

「あたぼうよ！こいつには俺のロマンが詰まっているからな！」

今度はもつと格好良いところを坊主に見せてやるさ！

「俺ももう少しリミッターに頼りきりにならず、機体性能の限界に挑んでみます」

「その時を楽しみにしているぜ、坊主！」

ティッシュとアタリメが握手を交わすのを遠目に見ながらサクラは考える。

（ティッシュさんがあのガンプラの機動力をマスターして、もつと前からスペリオルザ

クキャノンとコンビを組んでいたら、もつと違う結果もあったかも知れないな。

今回の敗北で新しいガンプラの案が浮かんだけれども、とりあえず、いまは保留にしておこう」

「サクラさん」

「あら、何かしらスパードくん？」

「今度、ガンプラを見て貰いたいんですが、構いませんか？」

「あらあら、私に惚れちゃった？」

「いえ、そう言うのじゃないんです。あのザクキャノン——旧キットなのにビーム仕様であれだけ撃つてもバツテリィ切れとか起こさなかつたじゃないですか？」

それにスモークやビッグガンの発想とか、アイディア刺激されちゃいましたね？」

「ああ。そう言う事ね・・・わかつたわ。今度、機会があつたらガンプラを見てあげる」
「ありがとうございます。それと・・・」

そう言い掛けてスパードはチラリと握手して健闘を讃え合うティツシユとアタリメのやり取りに視線を移す。

「俺もあんな風に信頼し合える関係って言うのを作つてみたくて」

「その気持ちは解らなくもないわねえ。あの二人は違う道を歩いているけれど、目指しているものが似ているもの」

「きつと、これからもお互いを高め合って行く・・・そんな関係なんでしょうねえ？」
「ティツシュさんは真っ直ぐだし、アタリメさんはなんののかんの面倒を見るのが好きだもの。」

相性が良いんじゃないかしら？・・・ちよつと妬けちゃうわね」

サクラはスパードとそんな会話をしつつ、既にバトルが終了して退席したムメイの存在が気掛かりであった。

ナーナの方も全力を出し尽くしたのか、満足そうにログアウトしたが、ムメイの方はこの程度のバトルで満足するとは思えない。

恐らく、何らかの形で再度、顔を出してくる可能性もあるだろう。

それこそ、ムメイが危惧したマスダイバーの再来となるかも知れない進撃の覇軍が再び日の目を見る時にでも・・・。

（まあ、いまから心配するような事でもないか・・・少なくともティツシュさんなら大丈夫だろうって言うのはムメイさんも戦った事で理解しただろうし）

「ああ。そうだ。坊主に一つ頼み事をしてもらいたいかな？」

アタリメのそんな声を聞いて、サクラはそれ以上を考えるのを止めるのであった。

「・・・えつと確か、この辺りで良かったかな？」

ティツシユはアタリメのメッセージを確認しながら目的の人物を探す。

(アタリメさんが俺に会わせたがっていたダイバーって、どんな人だろう?)

ティツシユはメニュー画面を開いて目的の人物がログインしてないかを確認してからカウンターへと向かう。

「すみません。大空アカリさんと言うダイバーの方を探しているのですが・・・」

「——GBNアバターを検索——プライバシーポリシーに低触する可能性があります——個人の特定を確認する際、閲覧記録などのデータは録音されますが問題ありませんか？」

尚、仮登録などの方はこの機能をお使い出来ません——以上を踏まえた上で同意確認をお願い致します」

「はい。問題ありません」

「同意を確認。現在、検索中——お待たせ致しました。大空アカリさんは恐らく、空を飛んでいると思います」

「——そらっ?」

第2話【レイドボス遭遇】

「——こんにちは。大空アカリです。」

現在、私は厄介事に巻き込まれています」

「いい加減、鬼ごっこをやめて、私と遊ぼう？」

（ガンダム・ナインボール・ルシファア）

GBN公式の野生のレイドボス——都市伝説紛いのものだと思つたら、まさか、本当に実在したとは……対して、此方は非武装である。

ガンプラなのに非武装と疑われるかも知れないが、私はただ空を自由に飛びたい思いでガンプラを——アナザースカイを作つた訳なので戦闘が目的ではない。

今日だって、いつものように空を飛んでいただけ……だと言うのになんで、こんなマジ物のレイドボスと遭遇するかな？

いや、探索とかでレイドボスに遭遇するくらい、レアなんだけれども、これは喜ぶべき自体ではない。

おまけにこのままだと、次のエリアまでこのレイドボスはついて来る模様」

「……ああ。こんな事なら今日のガンプラ占い、聞いておくんだつたなあ」

(そんな事をぼやきながら私は戦闘エリアに突入してしまうのでした。マル)

レーダーを確認しつつ、ティツシユはホームで出会ったゲンと共にフィールドを探索していた。

「すみません、ゲンさん。初対面なのに人探しとかに付き合わせたりしてしまって……」
「気にする必要はないよ、ティツシユさん。」

まあ、アタリメのおっさんにアカリさんの事を頼んだのも俺みたいなものだしね？」
ティツシユの機動型ザクと並んで飛行するストライクノワールのベースであるペイルライダー・シユルティンの操縦者であるゲンがそう言うって笑うとティツシユは彼に質問する。

「……えつと、ゲンさんはアカリさんのお知り合いか何かなんですか？」
「いや、知り合いつて訳ではないんだが、この宙域を拠点にあちこち飛び回っているようだから前から気にはなっていてね。」

ここら辺で見掛けるようになったのは最近だけれど、戦闘エリアでも我関せずって感じで逃げ回ってばかりで戦闘意思が見えないからさ。

あれはきつと、何かしらの理由があつて攻撃出来ないんだろうけれど、その理由つてのが前々から気になっていてね。

風の噂じゃあ、どっかのフォースが嫌がらせにレイド関連を押し付け役として使っているなんてのも噂も聞くよ」

「故意かどうかはともかく、放っておけないって事ですね？」

「そう言う事。まあ、だからこれはその調査つて訳さ」

そう言つてゲンのペイルライダーが静止する。

「・・・妙だな。普段なら、この宙域で慣らし運転がてら飛んでいる筈なんだけれども」「この隣のエリアはバトルフィールドですね」

「本当にレイドボスを引き連れてバトルエリアに向かったのか？」

「確認する必要があると思います」

「OK。これからバトルエリアに入るけれども、くれぐれも気を付けて。あくまでも人探しが目的だから他の連中を刺激しないように注意してね」

「了解です。急ぎましょう」

機動型ザクとシユルティンは飛行モードのまま、バトルエリアに突入する。

まさか、この先でとんでもない事が起こっていたなど、この時の二人は知る由もなかった事であつた。

第2話【撤退戦・1】

「・・・おいおい。こりゃあ、なんの冗談だ」

通常エリアからバトルエリアに突入したゲンは思わず、そう口にしてしまった。

現在、バトルエリアは突如、現れたレイドボスによる戦闘が繰り広げられていた。

「なんだよ、あれ!？」

「知らねえよ! 兎も角、逃げるぞ!」

圧倒的な力を前に撤退するフォースもあったが、レイドボスは止まらない。

「さあ! 私を満足させてよ!」

レイドボスはストライクフリーダムの改造機らしかった——問題はその圧倒的武装の数々である。

何をどう、そこまでしたら、あんな魔改造が出来るのかと思える程、大量のギミックが搭載されていた。

「・・・あれはまさか、ガンダム・ナインボール・ルシファーか?」

「知っているんですか、ゲンさん?」

「噂程度にね。GBN公式の野生のレイドボスっての噂を聞いている。近年、うちの

フィールド辺りで目撃情報があったんだが、こんなところにまでいるなんてな」

ゲンの説明を聞きながらティツシユは固唾を飲む。

あれはいまの自分にはどうする事も出来ない相手だと言うのは解った。

しかし、このままと言う訳にもいかない。

そんな事を考えていると一機のザクキャノンが近付いて来る。

そのザクキャノンには見覚えがあった。

「ティツシユさん？なんで、こんなところにティツシユさんが？」

「サクラさんこそ、どうして、こんなところに？」

「私の方は野良相手にバトルしていたところよ」

「そうなんです。こちらは人探ししていたらバトルフィールドまで来ちゃいました」

「そうなのね。でも、いまはこのバトルフィールドもこんな状態だし、悪いけれども撤退

するのを手伝って貰えるかしら？」

「わかりました。ゲンさんも構いませんか？」

「乗り掛かった船だ。問題ない」

「二人共、ありがとう。早速だけれど援護をお願いね」

スペリオルザクキャノンに搭乗するサクラがそう告げるとティツシユ達は散開し、撤退しようとする他のダイバーの救援へと向かう。

ささらは圧倒的な力を前にして戦慄していた。

自分のガンプラであるジムベースのガンプラには自信があつたが、そんなものを嘲笑うかのように目の前のガンダム・ナインボール・ルシファーは周囲を蹂躪している。

自分のファンネルのようでファンネルでない剣のようなビットのお蔭で相手が無限に繰り出す複数のGNビットの類いからの被害は最小限に食い止められているが、それもいつまで保つか解らない。

最早、じり貧の状態にあつた。

(GNファンングにGNファンネルその他諸々……どんな神経していたら、これを複数同時に操るなんて芸当出来るのよ!?)

ささらはそんな事を思いつつ、反撃の機会を窺う。

周囲はガンダム・ナインボール・ルシファーの異常な戦闘力に撤退戦を考えているらしく、弾幕を張って徐々に後退している。

(撃破よりも生き残る事が優先、か……まあ、相手が相手だし、仕方ないと言えば、仕方ないけれども)

「援護する！いまのうちにあんたも撤退するんだ！」

そう言って現れたのはストライクノワールベースのペイルライダーであった。

レイドボス前の先のバトル中にはいなかった筈なので恐らく、異変に気付いて支援に
来たガンプラなのだろう。

「・・・他のダイバーの人達の撤退状況は？」

「さつき来たばかりで解らない。いま、連れと一緒に逃げ遅れた奴を探しているところ
さ」

「なら、私は大丈夫だから他のダイバーを手伝って上げて」

「だが・・・」

「大丈夫。私のガンプラ——じむかばりーもそんなにヤワじゃないから」

ペイルライダーはしばし迷うと後方を向き、ささらのじむかばりーとは別の方角へと
飛んで行く。

「無茶だと思ったら、救難信号をくれ！必ず、助けに向かうからな！」

「ええ。ありがとう。その時は宜しくね」

ささらは礼を言うと同じむかばりーの改造で搭載したサラミス艦の砲台でガンダム・ナ
インボール・ルシファーに狙いを定める。

第3話【撤退戦・2】

ティツシユも上昇して周囲を観察する。

「・・・酷いな」

ガンプラは自分の思い描く最強の機体などであるが故にその思いが反映される。

しかし、一方的過ぎる蹂躞を前にティツシユは言葉を失った。

確かに自分の好きを表現したガンプラなのかも知れない。しかし、その圧倒的な力の前に想いを籠めたガンプラが無慈悲に破壊されるのは憤りを感じた。

圧倒的な力の暴力・・・それに対して、ティツシユは怒りの感情を覚えていた。

——そんなティツシユのリーダーに何かが表示される。

モニターを拡大するとTR-6をベースにしたガンプラが漂っていた。

「・・・新手的敵?——此方に交戦の意図はありませんわ」

「安心して下さい。危害を加えるつもりはありません」

ティツシユはそう言ってTR-6を観察する。

ハイゼンスレイIIの頭部に背中の中のブースターも無事そうだが、武装らしい武装はない。

「レイドボスとバトルして武装を使い切ってしまったんですか？」

「いえ・・・その、このアナザースカイは元々、非武装でして」

「え？元から武装がないんですか？」

「ええ。私はただ、この空を飛びただけですから」

相手がそう言うのとティツシユは目の前のTR-6の改造ガンプラの持ち主が目当ての人間だと確信する。

「ひよつとして貴女が大空アカリさんですか？」

「ひえっ！何故、私の名前を!？」

「えっと、人探しを頼まれていまして——ああっと警戒はしないで下さい。」

先程も言いましたが、此方が危害を加えるつもりはありませんので」

ティツシユはなるべく、相手を刺激しないように言葉を選びながら質問する。

「あの、どうして非武装なのにバトルフィールドへ？」

「来たくて来た訳ではありませんわ。あのレイドボスがこの隣のフィールドで現れて、それからずっと狙われてしまいました。」

振り切る為に逃げていたのですが、こうなってしまったのです。本当にいつも、こうなんですから」

「なるほど。では、噂になっているフォースの嫌がらせとか、そんな理由ではなく、単に

逃げていたら、こうなっちゃったと?」

「ちよつ——なんですか、その噂!？」

嫌がらせとか、そんな理由では断じて、ありません!？」

その言葉をティッシュは信じる事にした。

直感だが、相手が嘘を言っているようには思えなかったし、何よりもこんな圧倒的な力を誇示するバトルよりも空を飛びたいと言うだけの想いで籠められたガンブラの方がティッシュにはよっぽど、ロマンを感じさせるのであった。

「わかりました。信じます、その話」

「・・・信じてくださるのですか?」

「空を飛びたいから想いを籠めたガンブラ・・・良いと思います。」

ガンブラが自由ならGBNの中でどんな事をしたって自由だと思っんです。

何よりもこんな風に力を誇示するだけの戦いよりもよっぽど夢が詰まっていると思います」

「・・・そんな事を言われたの初めてかも知れませんか」

「ただ、そうですね——空を飛んでいるだけだとやっぱり、色んな人から狙われると思います。」

今度から何かあったら助けを呼んで下さい。出来る限り、助けに向かいますから」

「戦え——とは言わないんですね？」

「だって、純粹に空を飛びたいから作ったんですよ？——なら、それで良いじゃないですか？・・・アカリさんの夢はアカリさんの夢なんですから」

ティツシユはそう告げるとアナザースカイから離れる。

「俺が時間を稼ぎます。その間にアカリさんはこのバトルエリアから離脱して下さい」

「・・・あなた、名前は？」

「ティツシユです。まだまだガンプラ初心者ですが、やれるだけの事はやって見ます」

ティツシユは覚悟を決めるとガンダム・ナインボール・ルシファーに向かって飛んで行く。

「あんな風に思いを受け止めてくれる人もいるなんて・・・GBNも捨てたものではないわね」

大空アカリは独り、そう呟くとバトルエリアから離脱を開始する。

第4話【撤退戦・3】

「なにしているの、ティツシユさん！戻って!？」

「時間を稼ぎます！多分、少しは逃げる時間を維持出来る筈です！その間にサクラさん達も離脱を！」

「人柱になるつもり!?——馬鹿！本当に馬鹿!!」

サクラは頭をガシガシ搔いてから一息吐くと周囲に呼び掛ける。

「・・・スモークやジャミングの類いを持つているダイバーは他に誰かいるか？」

「あ、はい。俺が持ってます」

「他には——いないか。もしくは既に戦線を離脱したか、撃破されたか」

サクラはそう呟くとキツとガンダム・ナインボール・ルシファーを睨む。

「ティツシユさんのザクを支援する。可能な限り、全員が離脱する事で今回のレイドポスバトルは初めて我々の勝利となる。」

無論、実際のポイントなどにはカウントされないが、これは元々、イレギュラーな事態だ。

早期対策の為に我々は情報を持ち帰る義務がある。

その後、今回のレイドボスバトルは情報伝達後、各フォースが集結し、改めてレイドボスバトルを開始する——以上。質問等がなければ、今作戦を実行する」

サクラはあつという間に場を仕切ると残存するダイバーの撤退作戦を開始する。

フアングとビットの中を掻い潜りながら突っ込むなど、ティツシユに出来る芸当ではなかった。

そもそも、ティツシユにとってビットを相手にした事がなかった。つまり、完全な初見である。

そんなティツシユにガンダム・ナインボール・ルシファーは容赦する事はなかった。フアングによる串刺し、背面のブースターの破壊——全てはほぼ、一瞬の出来事であつた。

自分のガンプラなら機動性を生かせば、攪乱くらいは出来ると思っていた。

しかし、ティツシユの読みは完全に外れた。

それでもティツシユは諦めない。

レッドアラームが鳴り響き、警告サインが次々と表示される中、ティツシユはなんと

かザクを動かし、バズーカの照準を合わせ、発射する。

しかし、そのバズーカの弾丸すらもファンクで相殺され、ガンダム・ナインボール・ルシファーには傷一つ付けられなかった。

「その程度の攻撃で私を倒せるとでも？」

相手が挑発するような言動を聞きながらティツシユのザクは真つ逆さまに落ちて行く。

「通用しないのは解っている……けれども、そんな皆の好きを否定するようなガンブラに負けられない！」

ティツシユは地面に激突しながらも続けた。

最早、ザクに動くだけのエネルギーは残っていない。

幸い、爆発こそ、しなかったが相手の神経を逆撫でするには十分であった。

「ガンブラは自由だ。でも、他の人の自由まで奪うのは間違っている。」

あなたのガンブラはただ強いだけで自分を誇示したいだけのガンブラだ」

「知った口を！ガンブラが自由なのなら私がどんなガンブラを作ろうが勝手にしょ！」

「ええ。確かにそうです。でも、それはガンブラが凄いだけで貴方が凄い訳じゃない。

貴方は自分のガンブラの強さに酔っているだけの悲しい人だ」

「……気が変わったわ。ただの雑魚だから見逃すつもりでいたけれども、貴方はここで

始末する」

「……」

「《NTD》起動」

そう言つてガンダム・ナインボール・ルシファアが輝きだし、禍々しいオーラを放ち出す。

そんな中、ガンダム・ナインボール・ルシファアのダイバーであるルシフが見たのはティツシユのガンプラへの思いであつた。

喜び、悔しさ、怒り——そして、夢。

その中の一つにルシフのガンプラを否定する事への躊躇いも感じ、感情を共有していたルシフにも迷いが生まれる。

刹那、二方向からビームが放たれる。

それは直撃こそしなかつたが、ティツシユを狙うルシフを困惑させるには十分であつた。

それと同時にガンダム・ナインボール・ルシファアの周囲を煙が覆う。

「スモーク散布！総員撤退！急げ！」

音声を拾い、ファンングを飛ばすもそこにはビッグガンがあるだけで周囲には誰もいなかった。

気が付けば、自分を迷わせるあのザクの姿もなかった。

「・・・あのザクのパイロット・・・面白いわね」

誰に眩くでもなく、セラフは独り、ポツンと眩く。

逃げる相手を追う気にはなれなかった。これもザクの影響なのかは定かでないが、興味を持つには十分過ぎる理由であった。

「ゲンさん、ありがとうございます。お蔭で助かりました」

「良いって事よ。だが、そのザクはボロボロだな」

「ええ。俺がもつと上手く乗りこなしていたら・・・」

そんな風に前向きな考えのティッシュにサクラはため息を吐く。

「あのね。初見のビット相手に無策で突っ込んだら、普通に撃墜されるから。寧ろ、そのダメージで稼働出来るだけ、まだマシですよ。それよりも、あの言いくるめで相手がよくキレないかの方が冷や冷やしたわ」

「ははは・・・すみません」

ティッシュはサクラに謝ると苦笑した。

かくて、ガンダム・ナインボール・ルシファーからの撤退戦は作戦通りに上手くいったのであった。

第5話【運命の歯車】

撤退戦後、サクラは改めて今回の一件をアタリメに報告する。

「——と言う訳です、アタリメさん」

『そうか。相変わらず、坊主は無茶しやがるな』

『そうですね。あの真っ直ぐさは武器であると同時に弱点であるとも言えますね』

『悪いが、今後も坊主を支えてやってくれ』

『それはご自身でされた方が良いのでは？』

『自分の可能性って奴を確かめてみたくなっちゃったんだよ。あの時の感触を忘れてたくなくてな』

『だから、トレーニングモードで特訓中だど？』

ランキングも2000番台から更に上位にランクインしそうなのも勢いでしたね？』

『鉄は熱い内に打ってって奴だ。いまの熱いもんを忘れる前にもっと上を目指したくてよお』

『それもティツシュさんの影響ですか？』

『かも知れねえな。だからよ、俺が不在の間、坊主を頼めねえか？』

「仕方ありませんねえ。今回の件は貸しですよ」

『ああ。いつか、オフ会でもあった時に一本付けてやるからな』

「そのいつかがいつになるか解りませんか？——アタリメさんくらいですよ。カマ掛けてネカマだつてバレたの」

『俺もネット界限が長いからな。まあ、オフで会うと色々と困るのはお互い様だろ？』

「まあ、確かにそれは否定出来ませんけれどね」

サクラはアタリメとお互いに笑い合うとメッセージ通知を確信する。

「——つと宅配が来るらしいので今回はこれで」

『おう。またな——坊主の事、頼んだぞ』

サクラはそこで通話を切ると一息吐く。

(ティツシユさんを頼む、か・・・彼の性格と戦術に合わせるのなら、必然的にいまのガンプラではやや呼吸を合わせ難いな。それにまたレイドボス戦になった時、指揮をする人間が不在の時は私が今回みたく、指揮系統を組み込む必要がある——) となるとやはり、支援系統を強化する必要があるな)

サクラは独り、ティツシユの数少ないバトルの動画を確認しながら戦術と最適なガンプラを考え込む。

(よし。ティツシユさんの成長過程を踏まえ、いまのイメージしたガンプラを試す

か・・・)

サクラは納得したように頷くとログアウトし、イメージを模したガンπρα作りに取り掛かる。

「それじゃあ、フォースの嫌がらせ関連はガセだったんだな？」

「ええ。そうなります。アカリさんはただ、ひたすら空を夢見る人でした」

同じ頃、ティツシユは格納庫でゲンと大空アカリについての会話をしていた。

ゲンはシン・アスカに似たその顔で考え込むとティツシユに口を開く。

「——とは言え、バトル中のフライト関連は知らない連中からしたら問題になるだろう。護衛の一人くらいは必要だな」

「アカリさんと約束した以上、俺が護衛役を引き受けます」

「その時は俺にも一声くれ、ティツシユさん。いつでもつて訳じゃないが、元は俺が依頼した事に巻き込んだようなものだしな。少なくともティツシユさんよりはガンπραバトルの経験回数は多いからバトル関連の緊急事態になったら助けに向かうよ」

「ありがとうございます。その時は力を借りると思いますが、宜しくお願いします」

ティツシユはゲンに頭を下げるとゲンは照れ臭そうに頭を掻く。

「まあ、色々あったが、結果オーライって感じか……問題は俺達が良いけれども、当の本人がなあ」

「そうですね。バトルフィールドでのやり取りですからフレンド登録どころではなかったですから」

そんな話を話しているとティツシユのメッセージ通話に大空アカリから通知が届く。

「あれ？アカリさんから通知が……でも、どうやって？」

そこでふと、ティツシユは自分が大空アカリを探す為にカウンターを利用した事を思い出す。

「もしかして、個人アバターを検索した履歴で此方に気付いたのかな？」

「ああ。成る程——なら、アカリさんとさっきの話を相談するのは可能そうだな。とりあえず、あとは任せただから。」

俺はさっきのレイドボスについて、所属フォースに掛け合っただけで見るよ」

「わかりました。とりあえず、お互いにフレンド登録をしておきましょう」

「オツケー。改めて宜しくな、ティツシユさん」

「こちらこそ、宜しく願います、ゲンさん」

二人は握手してから、お互いのすべき事をする為にロビーへと移動する。

「まさか、あんなレイドボスが現れると思つても見なかつたわ」

同時刻、金髪のポニーテールを揺らめかせながらささらは別の格納庫で自分のガン普拉を見据えながら独り呟く。圧倒的な力の誇示したガン普拉——名前も知らぬあのザクの乗り手であるダイバーはその存在に否定的であつたが、彼女はあの圧倒的な力を持つガン普拉に魅了されていた。

「・・・次は私が勝つ。どちらの技量が上かを思い知らせてから今度こそ、完膚なきまでに叩く。」

その為にもガン普拉をもつと改造しなきやな。

私があんなザクごときの技量の持ち主に魅力で負けるとか許さない。

それをあのレイドボスに思い知らせてやるわ」

誰に言う訳でもなく、ささらは誓いを立てるとアイスブルーとヘテロクロミアのオツドアイを輝かせながら不敵な笑みを浮かべるのであつた。

「・・・あのレイドボスは私の獲物よ」

——斯くて運命の歯車は回り出すのであった。

第6話【平穩の崩壊】

——数日後、ティッシュは大空アカリとフライトする為に格納庫で出撃態勢にあった。

「準備は良いですか、ティッシュユさん？」

「大丈夫です。問題ありません」

大空アカリに訊ねられ、ティッシュは頷きながら答えると二人して格納庫から出撃する。

今回は大空アカリのアナザースカイに付き合い、飛行すると言った内容であった。

ゲンの方は所属フォースでレイドボスバトルに向けて準備をしている最中である。

故に今回はティッシュとアカリの二人によるフライトとなった。

「こうして、ただ空を飛行するって言うのも良いですね。」

フィールドを改めて観察する機会とか滅多にありませんから。こういうのフィールドワークって言うんですっけ？」

「そうですね。特に空を飛んでいると色々な発見がありますからオススメですよ」

ティッシュと大空アカリはそんな当たり障りのない会話をしながら、空を漂うように

飛行する。

「アカリさんは空が好きって事はいつかはリアルな空を飛ぶ事とかも考えていたりするんですか？」

「そうですね。いつかはそんな時が機会があれば、実際の空を目指すのも悪くなさそうですね」

「夢が叶うと良いですね」

「そう言うティツシユさんはどんな夢を持っているんですか？」

「そうですね。俺はリアルだとデザイナーのたまごですので自分のデザインした作品が広まってくれば・・・このザクもそんな思いを込めて、デザインしました」

「ああ。だから、市販で売られていた本物のドズル専用ザクとデッサンが若干、異なっているんですね？」

「そうなるってティツシユのザクの仕様って本当に普通のザクからデザインしたんですか？」

「ええ。通常のザクⅡF型に墨を入れて、過去のゲームで使用されていたドズル・ザビ専用ザクのデザインを見よう見真似でペイントしました。」

「だから、このザク自体も性能面では普通のザクとそんなに違いはありませんよ」

「そんなザクでいままで戦って来たんですね？」

「やつぱり、ザクが好きなのもありますが、初めて自分で作ったガンブラであり、作品ですから思い入れも強くて……いまのところ、このガンブラでバトルするのは勝ち星はありませんが、俺は勝ち負けよりも全力出し切れるかどうかの方が重要かも知れません。」

そりゃあ、このガンブラで勝てた方が嬉しさも違うかも知れませんが、負ければ、やつぱり悔しいです。

けれども、だからこそ、俺はこのガンブラと一緒に成長して行きたいって思うんですよ」

そんな風に自身のガンブラに対する思いを打ち明けるティッシュに対して、大空アカリは羨ましく思う。

「本当にティッシュさんは真っ直ぐな人なんですな。」

そんなティッシュさんからこそ、色々な人が支えてくれるんでしょうね」
「たまたま、巡り合ったGBNの人達が皆さん、良い人だったってだけですよ。」

もしも、アカリさんがそう思うのなら、そんなGBNのダイバーの人達のお蔭で俺も成長出来ているのかも知れませんが」

二人はそんな会話を楽しみつつ、フライトを心行くまで楽しんだ。

エネルギー残量が残り僅かになり、格納庫に戻ると大空アカリはティッシュに頭を下

げる。

「今日はフライトに付き合わせてしまって、すみません。

お蔭で普段とは違う体験が出来ました。

また機会があれば、一緒に空を飛びながら、お話ししましょう」

「はい。その時は是非。今度はゲンさんとも一緒に飛びましょうね」

ティツシユはそう応じるとログアウトする。

「・・・ふう」

ティツシユこと岩戸は一呼吸置いてから専用ゴーグルを置いて背伸びをする。

「岩戸。ご飯が出来たわよ」

「わかったよ、姉さん。いま向かうね」

岩戸はドアを開き、居間へと向かうと姉の作った料理を見て喜ぶ。

「今日はハンバーグなんだね？」

「ええ。今日は粗挽き肉が特売セールで安かったの」

「そうなんだね。それにしても姉さんの手作りハンバーグなんて久し振りだなあ」

そう言いながら岩戸は食事の準備をはじめ。

「ご飯をよそり、お互いに席に座ると「いただきます」と言っ、二人きりのささやかな食事の時間を楽しむ。

「——ねえ、岩戸。こんな時に言うのもなんだけれど、姉さんもGBNを再開しようと思うの」

「え？じゃあ、姉さんと一緒にGBNで楽しめるの？」

「そう言うのとは少し違うの……もしかすると私は岩戸に嫌われてしまうかも知れない」
「それって、どう言う——」

「岩戸にだけは伝えておくわね」

次の姉であるテラスが口にした言葉に岩戸は言葉を失い、手にしていた箸を落とす。

——次の日、GBNで大々的に進撃の覇軍による宣戦布告が公にされる。

「我々はブレイクデカール以上の改造ツールを手に入れる事に成功した。」

GBN内で虐げられ、敗北で苦しんで来たダイバー達よ。

我が軍門へと下るならば、今一度、かの栄光を約束しよう」

このニュースにより、運営側に批判が殺到する。

そんな中、GBNのトップであるクジヨウ・キヨウヤもまた公に進撃の覇軍へ宣戦布告する。

「これは過去からの挑戦状であり、我々が一致団結して乗り越えなくてはならない試練だ。」

ブレイクデカール以上の脅威がどれ程のものかは皆も知つての通りだろう。

これは運営側だけの問題ではない。我々は今一度、有志連合を結成する次第だ。故に皆の力を貸して欲しい。

全てはG B Nに生きる全ての為に・・・」

第3章【衝撃のZaku】

第1話【結成】

皇帝は黒と金のカラーリングの魔殺駆を背にニユースやネットの批判などを見据える。

「これで後には退けないね」

「このフォースは私達のフォース。最後まで付き合おう」

「・・・ありがとう、二人共」

「全ては皇帝の為に」

三人はそんな会話をしつつ、軍門へと下るダイバー達を見やる。

「我が軍への参加者には元マスダイバーだった人間もいる」

「構いません。寧ろ、これからを考えるのならば、そう言った人間が我が軍門に下る事を喜ぶべきでしょう。ピックアップを忘れないように」

「はっ！」

「——エルピー。あなたには苦勞を掛けます。戦闘時は手筈通りに」

「御意」

皇帝は黒い和装の裾を翻しながら真っ直ぐにこれから先の事を覚悟する。

「我が向かうは覇道なり。我が前に立ち塞がる武士達よ。」

その目に我が生き様をしかと焼き付けよ」

皇帝が断言した瞬間、魔殺駆から黒いオーラが溢れ出す。

知る者がいたら、その輝きを恐れただろう。

そのオーラはブレイクデカールの輝きに酷似した現象だったのだから。

「今回のフォースバトルは2フェイズによって成り立つ。

フェイズ1は宇宙からコロニーに侵入するもの、フェイズ2はコロニー内部から今回の首謀者である皇帝を撃破すると言うものだ。

これに関して質問等あれば、今のうちに聞かせてくれ」

説明するクジヨウ・キョウヤの言葉に一人のダイバーが手を上げる。

「今回のフォースバトルは無理に行う必要があるのですか？」

火元が解っているのなら、フォース関係者をアカウント凍結などすれば、問題ないのでは？」

「君の言う事は確かだが、これは過去の事例を踏まえたフォースバトルである事を念頭に入れて貰いたい。」

過去のマスダイバーの類いは裏で暗躍し、発見と処置に我々が追い付けなかった。

しかし、今回の場合は大元となる提供ダイバーとフォースが解つていと言う状況だ。

運営側はブレイクデカル以上のバグによる処置に対応する為にの準備が必要となる。我々は運営が対応にいち早く対応する為に時間を稼ぐと同時に首謀者を逮捕する——以上だ」

「他に質問があるものは？」とクジヨウ・キヨウヤが周囲を見渡すと「では、次にこれを見て欲しい」と告げ、フォースサイドの撮影された魔殺駆のスクリーンショットを公開する。

それを目撃して周囲がどよめく。

「そうだ。皆も知つての通り、このガンプラから発せられる黒いオーラはブレイクデカルを使用したものに類似している。」

幸い、未だにバグなどに関する情報はもたらされていないが、似た現象を引き起こし兼ねないとも言いがたい。

つまり、我々が思うよりも事は切迫していると見て良い」

周囲が未だにブレイクデカールの再来にどよめく中、クジヨウ・キヨウヤは真剣な目でその場にいる全員を見渡す。

「いま出来る説明は以上だ。今回も皆の協力を仰ぐ事になるが、また力を貸して貰いたい」

「ティツシユくんと言うのは君かな？」

ティツシユは声を掛けられ、目の前の有名人に振り返る。

「君の心中は察する。故にそれでも我々に協力してくれた事には感謝している」

「・・・事情は姉さんから聞いています。正直、迷いました。」

でも、だからこそ、俺はティツシユとして姉さんを止めたんです」

ティツシユの言葉にクジヨウ・キヨウヤは笑う。

「真っ直ぐだな、君は・・・リクくん達と初めて出会った頃を思い出すよ」

懐かしむようにクジヨウ・キヨウヤはそう言うってから真剣な表情に戻り、彼に一礼する。

「故に君にはすまないと思つている。此方の事情に付き合わさる形になつてしまつた事

に。

「今回の一件、互いに全力を尽くそう」

ティツシユにそう告げ、クジヨウ・キヨウヤは背を向けて去って行く。

ティツシユも踵を返して外へ出ると待っていたサクラ達を見詰めた。

「……ティツシユさん、覚悟は出来ているんですね？」

「はい。例え、どんな理由であれ、俺は姉さん達を止めなきやなりません。

俺にとつて、姉さんはいつも支えてくれる家族です。

そんな姉さんが間違つた道を進むのなら、俺が止めなきやならないんです」

ティツシユはそう言うところまで彼に付き合つて来たダイバー達に頭を下げる。

「お願いします！俺に力を貸して下さい！」

第2話【再来】

——フオースバトル当日。

その日、クジヨウ・キョウヤのガンプラの姿はなかった。

「どう言う事!?なんで、チャンプの姿がないの!？」

他のフオースが困惑する中、サクラがオーブンチャンネルで叫ぶ。

「狼狽えるな！チャンプにも考えがある筈だ！」

我々は前日に聞いた作戦通り、実行するのみ！——今回の作戦指揮が出来る者が存在しない、または自信がないのであれば、私が指揮を取らせて貰う！」

「他のフオースに指揮なんて冗談じゃない！」

「それならそれで構わない！ただし、我々の敵はあくまでも同じである事を忘れるな！」

サクラはそう締めるとオーブンチャンネルの回線をオフにする。

「サクラさんの統率力凄いですね？」

「お仕事か何かでやっていたんですか？」

「ネットには色んな人がいるのよ、ティツシユさん」

サクラはモニターに映るティツシユにウインクしながら、そう濁して返すと敵の数を

レーダーで確認する。

「敵の数は想定よりも少ないわね」

「問題は数よりも情報が本当なのか、ですか？」

サクラの言葉にゲンが質問し、スパルダが次のように述べる。

「もしも、本当にマスマイバターの再来なら狙うのならばコックピットだ。それが難しいなら高威力な火力で粉碎するしかない」

そう述べた途端、緊急警報が発生する。

そして——太陽が二つに増える。

「いまの輝きはまさか、アトミックバズーカ!？」

先行していたフォースは!？」

「……ほぼ壊滅です!？」

更に緊急警報が発生し、流星のサクラも焦る。

「敵味方の入り交じった状態でアトミックバズーカを連続で使用するつもりか!？」

「どう言う神経してやがるんだ、このダイバー!？」

「……いえ、ただの考えなしと言う訳でもなさそうですわね?」

焦るサクラに対して静かに怒りを込め、パトリシアがモニターを拡大し、損壊しながらも起動する覇軍に参加したガンプラの映像を送る。

黒いオーラこそ、発してないが、アトミックバズーカの火力に耐えたのだ。それは明らかなチート行為であった。

「……確信しましたわ。覇軍は私の敵ですわ。全力でぶっ潰しますわよ」
「で、でも、アトミックバズーカにも耐える防御力のガンプラにどう立ち向かえば、良いのか……」

戸惑う他のフォースのダイバーにパトリシアは「んなもん！知った事じゃねえですわ！」と檄を飛ばす。

「マスダイバーは徹底的にぶっ潰しますわよ！

違法な改造をしたガンプラに私達のガンプラが負けるものですか！

そもそも、気持ちで負けていたら勝てるものも勝てねえでしょうが！」

そう叫ぶや否や、パトリシアは対マスダイバー用のガンプラであるウォーターシツプ・ダウンで先行する。

そんな中、ティツシユはアトミックバズーカを放ったダイバーに心当たりがあった。

「敵味方関係ない……まさか、ポーさん？」

「そうだよ、私さ」

ティツシユの言葉にポーが応じるとオープンチャンネルでポーが叫ぶ。

「皇帝と戦いたくば、この皆殺しのポーの屍を越えてみせな！

最もアンタらがこのアトミックテストロイヤーの核攻撃を恐れないのだがだけれどね！」

「核攻撃の連発にチート行為・・・貴様らはGBNを壊す気か！」

それがダイバー達の逆鱗に触れたのか、指揮系統に乱れが産まれる。

それに気付कि、サクラが叫ぶ。

「——っ!?相手の挑発に乗って陣形を乱すな!さっきのアトミックバズーカの惨状を見てなかったのか!!」

その言葉に制止する者も入れれば、パトリシアのように無視する者もいた。

「撃たれる前にぶっ潰せば問題ありませんわ!」

「敵は一体じゃないんだぞ!」

「なら、このまま放置するんですの!?!」

互いに食い違う意見の中、ティツシユが動く。

「パトリシアさん!」

「あなたはゼロストの時の・・・ペーパーは下がちなさい!」

「いえ!俺も連れて行って下さい!ポーさんを説得します!」

「はあっ!?あなたは何を言っているの!?!」

「知り合いなんです!だから、俺が説得します!」

「正気ですの!?! 相手は敵味方関係なしに核を撃ち込むお馬鹿さんのよ!?!」

そんな事を言っている間に再び緊急警報が発生する。

そのもどかしさにパトリシアは「どうなっても知りませんわよ!」と叫ぶとティツシユと共にアトミックデストロイヤーへ向かって飛んで行く。

「・・・止まりな、ティツシユ。あんたを撃ちたくない」

「ポーさん。こんな事はやめましょう」

「皇帝から聞いているんだろ?——私等はまだ止まれないんだよ。それが皇帝の命令なのだから尚更ね?」

「それでも俺はポーさん達を——」

そんな話をしている間にもウォーターシップ・ダウンがアトミックデストロイヤーに急接近し、ジュリアンブレードを振るう。

そんなウォーターシップ・ダウンに対応する為にポーのアトミックデストロイヤーはバズーカを捨て、ビームサーベルで応戦する。

「ティツシユとのお話に夢中で私をお忘れだったかしら?」

「忘れちゃいないさ! ウォーターシップ・ダウンだろ!」

懐かしいガンプラじゃないか!」

アトミックデストロイヤーのザクⅢベースの口からビームを放たれ、パトリシアは距

離を取るとお互いに一歩も動かず、睨み合う。

「私の前世をご存知な方が敵とはやり難いですわね？」

「その化け物じみた機動力なら重武装のアトミックデストロイヤーじゃあ、分が悪いねえ——とは言え、あなたの方も攻め方に困るだろう。」

なにせ、此方は核武装なんだから。下手に攻撃したら核弾頭に誘爆しちまうかも知れないね？」

「——つたく、これだからチート行為とかするあなたが大嫌いなんですわ！」

「そうだよ！もつと私達を嫌悪し、憎悪を滾らせな！」

その力こそが皇帝の力となる！」

悪態をつく。パトリシアにポーは吼えるとウォーターシップ・ダウンに近接戦闘を仕掛ける。

「・・・行きな、ティツシュ」

「え？」

「あなたは皇帝の真意を知っていて尚、敵として、この場に立っている——いや、あなたが敵か味方かなんて、どうでも良い。」

あなたの思いを皇帝に聞かせてやりな。

結果は変わらないにせよ。あんたらの姉弟の關係に関わるだろうからよ」

「・・・ポーさん」

「もつと別の形で会いたかったもんだ」

ポーがそう呟くとティツシユは二人に背を向けて、一足先にコロニーへと向かう。

そんなティツシユのザクに覇軍側のダイバー達が砲撃を開始しようとするが、ポーがそれをオープンチャンネルで止める。

「そのザクに手を出すんじゃないよ！そのザクのダイバーは皇帝の弟なんだからね！」

その一声に敵からも味方からも困惑の声上がる。

それはパトリシアも変わらない。

「ティツシユが首謀者の弟？——それは本当ですか？」

「ああ。本当さ。だが、あんたが多分、思っているようなスパイ的な理由で敵対関係の位置にあるんじゃないよ。」

まあ、その時が来たら全部話すよ——もつとも、それはいまじゃないけれどね！」

そう叫んでポーとパトリシアの戦いの幕が切つて落とされるのであった。

第3話【大乱闘バトル】

先にコロニー内部へと入ったティツシユが見たのは砂塵の舞う砂漠の世界であった。

その遙か彼方でエルピーが作った素組みのザクⅡ改が12体ほど用意され、その後方に他のダイバーのガンプラが整列しているのをモニターで確認しながらティツシユはその頭上を飛行する。

そんなティツシユにエルピーから通信が送られる。

「・・・エルピーさん」

「ティツシユさん。行きたいなら行くの良い。あなたの選択はあなたのもの」

「退いてはくれないんですね？」

「それが私達のフォースだから・・・それが私達が自分で選んだ道」

「・・・そうですか」

「それと一つだけ言っておく」

エルピーはそう告げると恥ずかしそうにモジモジと身をよじる。

「その・・・私は何もしない———と言うか、役目は終わっている。あとは皇帝の判断だけ」

「それはどう言う———」

「全ては皇帝の為であり、私達自身の為・・・そして、マリアを忘れない為——その為に私達の道は私達が記す。ティツシユさん、あなたはあなたで皇帝と話し合うべき・・・過去に何があつたかを全てを聞いて、ティツシユさんが自分で選択して。願わくば、私達を糧にして自分の道を歩んでいって下さい」

それを最後にエルピーからの通信が途絶える。

ティツシユはエルピーの言う全ての真相を知るべく、機動型ザクのバーニアを加速させた。

砂漠を越えた次元の歪みの果てでそれは鎮座していた。

「・・・来たのね、岩戸——いえ、いまはティツシユだったわね？」

「姉さん。こんな事はもう、やめよう」

「それは出来ないわ」

そう告げると黒衣の復讐者は立ち上がる。

その背後には黒いオーラを放つ魔殺駆が佇んでいた。

「あなたには解る？——このGBNに巣食う負の連鎖のオーラが・・・この力を断つ為にも誰かが人柱にならなくてはならないの」

「・・・どうして、そこまで」

「まだ、あなた以外が来るには時間も余裕もあるし、少し昔話でもしましょうか・・・オー

プリンチャンネルにしてね？」

『私達は元々、GBMからやってきた古参だった。その為、GBMとGBNのあまりの違いに元からいたメンバーは離れていった私達もGBNから早々に離れようとした。』

そんな時だった。あの子に——マリアに出会ったのは』

「……皇帝。そうか。全部話すんだね。」

あんたがそのつもりなら、私達は皇帝の意のままに」

「こちらを攪乱しようとしても無駄ですわ！」

マスダイバーは徹底的にぶっ潰しますわよ！」

「……ああ。そうだ。それでいい。マスダイバーなんてあったらいけないんだ」
憤慨するパトリシアに対して、ポーは独り呟くと突っ込んでいく。

——核武装をパージしながら。

「……なんのつもりですか？」

「ねえ。あんた、いまはなんて名前だい？」

「……パトリシアですわ」

「・・・そうかい。じゃあ、パトリシア・・・あとは頼んだよ」

そう言つて自ら特攻したポーのアトミックデストロイヤーは撃沈する。

『・・・マリアとの出会いがあつたからこそ、私達は変わった。

GBNという新たな世界で私達は時間を共に過ごし、私達自身もいつしか、この世界での楽しみ方を彼女から教わつた。

マリアがいたからこそ、私達自身が変わるきっかけを彼女から与えられた』

スパードはビームブーメランを飛ばし、戻つてきたブーメランを射出したアンカーで再度、投擲しながら周囲の状況を他のダイバーに伝える。

「こいつらはただの一撃で撃破しないだけの通常ガンプラだ！繰り返す！こいつらはただのガンプラだ！」

落ち着いて撃破すれば、倒せない敵ではない！」

その背後から迫るガンプラにゲンのペイルライダー・シユテルンが割り込んで防ぎつつ、いまの会話について訊ねる。

「通常のガンプラって、どう言う事だ？——こいつら、マスダイバーって奴じゃないのか

「？」

「能力も性能も通常のガンプラだ。ただ、一撃死を回避するなんらかの細工が仕組まれているのは確かだが、マスダイバーのそれじゃあない」

そんな話をしていると所属不明の何かが乱入し、敵味方関係なく、攻撃を開始する。

「うふふ。チャンプも面白い事を考えるのね」

「ナインボール？・・・公式のレイドボスがなんで——どわああああーっつ?!」

「それはね。これが答えよ」

ガンダム・ナインボール・ルシファーに乗るルシフがそう言って回線を運営のチャンネルへとセッティングする。

「現在、有志連合とマスダイバーとして公にしている進撃の覇軍で交戦しているバトルが公開されていると思うが、有志連合のリーダーであるクジヨウ・キョウヤが訳あつて不在であつた為、このゲームを途中参加有りに設定し直した。

無論、これに対しては両陣営からの同意の元、設定をこちらで変えさせて貰った次第である」

そう言つてモニターにアップされたのはゲームマスターであるリガズイであつた。

「戦闘をしながら聞いて欲しい事がある。まず、はじめに我々、運営は此度の一件について謝罪したい事がある。

今回の一件——裏で画策したのは運営サイドである。

正確には今回のバトルは改造ツール対策ではない。運営サイドで試験的に仕様した拡張スロットの配備とそれに伴う特殊スキルの試験だ」

そんな会話でマスダイバー側の陣形が乱れ、他のダイバーのガンプラが攻撃を再開する。

「一撃で沈まない事を除けば、通常のガンプラか……それなら旨味つてもんがある訳だ」「リオン。幾ら十倍報酬だからって先行し過ぎるなよ?」

「わかってるよ、コルメさん」

逃走しかけたガンプラに追い討ちを描けるべく、途中参加したダイバー達が乱入するかに見えたが、途中参加組のガンプラはスパイダーやゲンの前に立ち塞がる。

「これより拡張スロット組の撤退支援に入る」

「ログアウトしたいダイバーはお早めに尚、前歴なしにはログアウトしても十倍ボーナスタイムだよ!」

一機でも撃墜してから報酬貰って帰る事をオススメするってさ。まあ、運営の告知そのままだけれどもね!」

その叫びに周囲のガンプラが騒然となり、このバトルは最早、どちらが敵か味方か判別出来ぬ状態となった。

「……うふふ。会いたかったわよ、あの時のレイドボス……さあ、あの時のザクじやなくて、私だけを魅せてあげる」

「……誰？ 貴女？ 前に会った事あったかしら？」

「すぐ思い出させて上げるわ。私の新しく生まれ変わったじむかばりーでね！」

——かくて、運命の歯車は噛み合い、その旋律を奏で始める。